

厚生労働科学研究費補助金食品の安全確保推進研究事業
(総合) 分担研究報告書

食品リスクコミュニケーションにおけるソーシャルメディアの有効性
: 知識量と事前態度のセグメンテーションによる検討

研究分担者 杉谷陽子 上智大学経済学部 准教授
研究協力者 高木彩 千葉工業大学社会システム科学部 准教授

研究要旨 本研究の目的は、食品リスクコミュニケーションにおけるソーシャルメディアの活用の可能性について検証することである。先行研究より、ソーシャルメディア上の食品リスク情報は、既存メディアと同程度の影響力を持ち、また、人々の食品リスクへの関心を引き出す効果が認められている。しかし、それらの食品リスク情報が、すべての利用者に対して、同じ強さ、同じ方向性の影響力を持つわけではない。そこで本研究では、マーケティング領域で広告効果を捉える際に用いられるセグメンテーション・ターゲティングの考え方を援用し、一般生活者をセグメント化して、セグメントごとに適切なリスクコミュニケーションを計画する必要性について検証することとした。26年度および27年度の調査及び実験を通じて、知識量と事前リスク認知レベルによってセグメンテーションを実施した上で、ソーシャルメディア上の食品リスク情報の影響力を検証した。その結果、知識量が少ない者、事前のリスク認知レベルが低い者は、リスクコミュニケーションによって影響を受けやすいことが示された。また、特定のソーシャルメディアへの接触とリスク認知レベルや知識量との間に有意な関係が見られ、今後の食品リスクコミュニケーションにむけて、ソーシャルメディアを活用することの有効性が示唆された。

A. 研究目的

本研究は、食品リスク情報を提供するメディアとしてのインターネット、とりわけソーシャルメディアの有効性について検証を行うことを目的とする。

インターネットの登場以降、食品リスク情報の主な入手経路は大きく変化していると言える。かつては、ニュース番組や新聞などのマスメディアを通じて、食中毒事件などを知り、それに付随して情報提供を受ける形が多かったと思われる。あるいは病院のポスターやチラシなどを通じ情報提供を受けることもあったであろう。いずれにしても、政府や公的

機関から一方向的に情報を得るといった形態が主であったと言える。

しかしながら近年では、主に若年層を中心として、テレビ離れ、新聞離れが指摘されており、その一方で、インターネット利用率は高い水準となっている(総務省情報通信政策研究所, 2015; 添付資料1参照)。特に10代や20代においては、テレビよりもインターネットの視聴に費やす時間の方が長くなっており、新聞の閲読率も極めて低い値にとどまっている。したがって、テレビニュースや新聞などのマスメディアを活用したリスクコミュニケーションに重点を置くことは、

高年齢層に対しては有効であるかもしれないが、若年層においては訴求力を持たない可能性が懸念される。また、若年層は町会や自治会への加入率も低いことが分かっており(総務省, 2014)、地域のネットワークを活用した説明会なども、若年層においては有効な手段とは言えない。また、若年層に限らず、中年層以上においても、今後はマスメディアや自治会ネットワークに頼らないリスクコミュニケーションが重要となってくると考えられる。テレビ視聴時間や新聞の閲読率は、経年変化を見ると、高年齢層においても低下傾向にある(総務省情報通信政策研究所, 2015)。個人情報保護や個人プライバシーの観点から、町会・自治会のような地域を結ぶネットワークも、今後衰退していく可能性もある。従来の情報提供の在り方を見直し、効果的な代替手段を検討することは、重要な課題であろう。

このような現状において、ソーシャルメディアは、注目すべきいくつかの利点を備えていると考えられる。第一に、その利用率の高さである(総務省情報通信政策研究所, 2015; 野村総合研究所, 2014)。利用時間で言えば若年層において特に利用が多いが、利用率で見ると高年齢層においても高い値であることがわかる(添付資料2参照)。すなわち、ソーシャルメディアを用いたリスクコミュニケーションは、年代を問わずに訴求力を持つことが示唆される。もう一つのメリットは、ソーシャルメディアに限った話ではないが、インターネット・コミュニケーションには双方向性があるという点である。一方向的に情報が流れてくるマスメディアと異なり、誰もが容易に情報発信者にもなれる。したがって、疑問があれば投げかけたり、議論をしたりすることが可能である。食品リスク情報のように、白か黒かと正解を一つに絞れないような話題においては、双方向的

なコミュニケーションは極めて重要な役割を担うと思われる。

しかしながら、その一方で、ソーシャルメディアの活用には懸念点がないわけではない。インターネット上に流通している情報は、情報源が定かではない場合も多く、誰もが匿名で発信者になれるということからも、その信頼性は必ずしも高いとは言い切れない。特に食品リスクのような、誤れば命にかかわるような重要な情報については、ソーシャルメディアのようなCGM(Consumer Generated Media)ではなく、ある程度権威づけされたメディアからの情報でなければ信頼されず、したがって適切なリスク認知やリスク対処行動を動機づける力を持ち得ないかもしれない。ただし、見方を変えれば、この問題はメリットにもなり得る。ソーシャルメディアは、利用者にとって、情報の発信者が自分と同じような立場の生活者であるという特徴がある。医師などの専門家がマスメディアを通じて情報発信する場合には、確かに権威はあるが、それゆえに遠くの話と捉えられ、あまり自分に関わる問題として関心を持たれないかもしれない。彼らにとっては、近い人間が情報の発信者であるということは、関心を持って情報に接するきっかけとなり得る。そのように考えると、「誰もが情報の発信者になれる」という特徴は、インターネットがリスクコミュニケーションの場として非常に有効である可能性にもつながるだろう。

この予測通り、杉谷(2014)では、インターネットが食品リスク情報を提供するメディアとして、有効である可能性が示された。具体的には、次のような知見が得られている。

1. Facebook、Twitter、Yahoo!知恵袋などの食品リスク情報は、公的機関のウェブサイトの情報と同程度に信頼できる情報と認識されている。これは、年代を問わずに見られる現象である。

2. かといって、人々はそれらの情報を鵜呑みにすることはなく、食品のリスクについては冷静に吟味する姿勢を持っている。

3. ソーシャルメディアにおいてディスカッションを行うことで、人々は食品リスクに関する関心を高め、また、リスク対処行動を積極的にとろうとする意思を強めている。

以上の結論は、食品リスク提示メディアとしても、インターネットおよびソーシャルメディアの有効性を示唆するものと言えよう。

しかしながら、食品リスク情報に接した時の人々の反応は一概には予測できない。すなわち、その人が立場やリスクに関する知識量によって、同じ情報に接してもその反応は大きく異なるだろう。例えば、幼い子供を持つ親と高齢者、あるいは健康な20代の若者では、同じリスク情報を提供しても、その反応は異なるものと予測できる。また、例えば料理に関心が高く、普段から食品のリスクについて考える機会が多く知識が多い人と、1日3食を外食で済ませることを当たり前としているような人とは、やはり同じ情報に接しても反応は異なるだろう。これまでの研究は、そういった前提を一切問わずに行われた検討であるため、現実場面へ知見を応用するためには限界が多いと考えられる。

マーケティングや消費者行動の研究領域においては、消費者を年齢や性別のような人口学的特徴だけでなく、価値観やブランド態度のような心理学的変数で分類し、マーケティング活動への反応を予測する手法が一般的である。例えば、ある一つの広告を提示した場合、それに消費者がどう反応するかは、その人の事前の態度や知識量によって大きく異なる。消費者をマスで一様に捉えるのではなく、まず消費者をいくつかのセグメントに分け、その中の誰を対象にしているの

か、ターゲットを絞ることで、意図通りの最大限の効果を得ることを目指す。

食品のリスクコミュニケーションにおいても、同様の視点が重要であろう。すなわち、一般生活者をいくつかのセグメントに分けて捉え、それぞれの特徴に応じた適切なリスクコミュニケーションを設計する必要がある。そこで本研究は、広告効果の研究において重要とされている代表的変数である「知識量」と「事前態度」について注目し、生活者をセグメント化することを試みた。本研究にあてはめてより具体的に表現すれば、知識量とは「食品リスクに関する知識量」であり、事前の態度とは、「その食品の摂取を危険と捉えているか、問題ないと捉えているか」ということである。この2つの変数によって生活者をセグメント化し、リスク情報の効果を検証することで、対象者別にリスクコミュニケーションの評価を検証できる枠組みの確立を目指す。

なお、この検証には、いくつかのステップが必要である。本研究は2年間にわたって次のような手順で検証を進めた。

26年度：一般生活者を予測通りの各象限（クラスター）に分類可能かという点と、各クラスターに分類される消費者の特徴を把握することを目的として予備調査を実施した。

27年度：ソーシャルメディア上の食品リスク情報を提示し、その事前事後でリスク認知や行動意図がどのように影響を受けたかを検証する実験を行った。結果は予備調査で得られた4つのクラスターごとに比較を行った。

B. 研究方法

1. 研究1（予備調査）

予備調査では、食品リスクに関する知識量、食品の嗜好、ライフスタイル、メディア接触などについて、調査回答者に回答を求めた。

取り上げた食品リスクは、食品添加

物、カフェイン、牛の生食に関するリスクを対象とした。食品添加物は、リスクが高いものから低いものまで様々な種類があり、知識を問うのに適切であるという点と、古くからリスクが議論されてきたことから誰しもが何らかの態度を有していると予測される点から選定した。カフェインは、様々な議論があるものの、相対的にはリスクが低いと一般には考えられている食品として取り上げた。近年では健康に良いという報告も多くなされていることから、事前態度に分散が大きいと予測される点も選定した理由である。牛の生食は、近年注目を集めた食品リスクであるという点から選定した。牛を生で食べることは、食の文化とも関わりがあり、事前態度は強固であると予測できる。その一方、近年ニュース等を通じて様々な報道がされていることから、メディア接触との関連を分析するのに適切であろうと判断した。

(1) 調査対象者：調査会社のモニターより抽出された一般生活者 543 名 (25 歳 ~ 65 歳)。ただし、政府・公官庁関係者、飲食店勤務、食品メーカー勤務、報道関係勤務、医療従事者は除く。

(2) 調査時期：2014 年 11 月

(3) 調査手続き：ウェブ上で、添付資料 3 に示す調査票に回答を求めた。

2. 研究 2 (本実験)

本実験では、食品リスクとして食品添加物を取り上げて研究対象とした。予備調査では、食品添加物、カフェイン、

牛の生食に関するリスクを対象として調査を行ったが、その 3 つの中で、食品添加物がかつ偏りが少なかったため、セグメンテーションによる検討に適していると判断した。

また、実験参加者に提示するリスク情報の主張内容は 2 種類用意した。食品リ

スクコミュニケーションとは、必ずしも食品の危険性を訴えかけて理解してもらおうということだけではない。摂取するリスクと安全性について、十分に情報を吟味し、自らの対処を考えることが重要である。したがってリスク情報の影響力を検討するにあたり、提示するメッセージが「食品は危険だ」という一方向のみであるのは不十分であろう。そこで実験では、リスク回避的なメッセージとリスク容認的なメッセージを用意し、両者の影響力を比較した。分析においては、添加物のリスクに対する事前態度でセグメンテーションを行うが、この手続きにより、事前態度と実験刺激の主張の方向性のマッチングから、その効果を検討することも可能となる。

実験は Web 上で実施した。まず、対象者の食品添加物に関する知識量を測定した後、リスク認知レベルを問うた。次に、ニュースサイトおよび Facebook 上の個人の書き込みとして、食品添加物に関するリスク情報を提示し、それを読んだ後で、再度リスク認知レベルを測定した。情報を読む前と後で、どの程度リスク認知が変化したかを、知識量と事前のリスク認知レベルでセグメンテーションをした上で、比較した。

(1) 対象者：調査会社のモニターより抽出された一般生活者 483 名 (25 歳 ~ 65 歳)。ただし、政府・公官庁関係者、飲食店勤務、食品メーカー勤務、報道関係勤務、医療従事者は除く。

(2) 実験時期：2015 年 11 月

(3) 実験計画：リスク情報の提示メディア (ニュースサイト or Facebook) × リスク情報の内容 (リスク回避的 or リスク容認的) の 2 要因被験者間計画であった。

(4) 実験手続き：実験はウェブ上で実施され、Time1、Time2 の 2 段階で構成されていた。

Time1:実験参加者は指定されたウェブサイトへアクセスした。そこでは、食品添加物に関する知識量を問う正誤問題が出され、各問について、「正しい」「正しくない」「わからない」の3つの選択肢の中から一つを選んだ。また、食品添加物に関するリスク認知レベルを問ういくつかの設問に回答した。具体的な設問は、添付資料4に示した。

Time2:2週間後に、実験参加者は同じウェブサイトへ再度アクセスした。画面には、以下のいずれかの1つがランダムに提示されるように設定されていた。

ニュースサイトに掲載された添加物の危険性を訴えるメッセージ（ニュース・リスク回避的メッセージ条件）

ニュースサイトに掲載された添加物の安全性を訴えるメッセージ（ニュース・リスク容認的メッセージ条件）

Facebookに書き込まれた添加物の危険性を訴えるメッセージ（Facebook・リスク回避的メッセージ）

Facebookに書き込まれた添加物の安全性を訴えるメッセージ（Facebook・リスク容認的メッセージ）

以上4つのメッセージのいずれかを読んだ後、実験参加者は、Time1と同じリスク認知レベルを測定する設問に回答した。また、実験刺激であるメッセージを精読したかどうかを確認するために、メッセージ内容に関する正誤問題に回答させた。最後に、個人差として、健康への関心やパーソナリティを問う設問、普段のSNSの利用状況についての設問にも回答した。具体的な設問は添付資料4に示した。

なお、実験で提示したメッセージ（ニュースサイト条件）は、いずれも実在するサイトに記載されていた記事をそのままスクリーンショットで撮影して用いた。Facebook条件では、その記事を個人の発言として投稿し、その画面のスクリーンショットを用いた。

C. 研究結果および考察

1. 研究1（予備調査）

（1）リスク知識量

食品添加物は全15項目、カフェインは13項目、牛の生食は10項目の正誤クイズを行い、この正答数を知識量とした。それぞれ、中央値折半で、知識量が多い群と少ない群に分類した。正答数の分布は添付資料5,6,7の通り。

（2）リスク認知レベル

「食品添加物の摂取は危険だと思う」「カフェインは健康に悪いと思う」「牛の生食は危険だと思う」という設問に対する回答を対象として、リスク認知高群と低群に分類した。回答の分布は図の通りであった。

各設問への回答は7段階で求めており、概念的にみて、4「どちらでもない」を除いて、5以上が危険だと感じるという回答、3以下が危険ではないと回答していることを示す。したがって、リスク認知の高低を分類するには、4を除き、5以上と3以下で集計するのが妥当であろう。

しかし、4を除いて折半したところ、設問によって大きく分布が偏ってしまった。すなわち、添加物と牛の生食は、危険だという方向の回答が全体の50%程度を占め、危険ではないという方向の回答（3以下の回答）は20%以下となってしまった。また、カフェインは危険ではないという方向の回答が50%程度を占め、危険だという方向の回答が20%程度となった。そこで、4の「どちらでもない」を、添加物と牛の生食では「リスク認知低」群に、カフェインでは「リスク認知高」群に合算することとした。これによって、各クラスに分類される人数の極端な偏りを回避した。（添付資料8,9,10参照）

(3) 各クラスタに分類される人数(リスク知識量とリスク認知レベルのクロス集計)

リスク認知量の多少とリスク認知レベルの高低でクロス集計を行ったところ、各セルの人数は下記の通りとなった(添付資料11)。

ただし、4「どちらでもない」を除外して集計した場合には、この結果は大きく異なる(添付資料12)。

添加物と牛の生食では、知識がある場合にリスク認知が高い人が多く、カフェインでは知識がない場合にリスク認知が高い人が多くなるという関係が示された。テスト正解数と危険性認知の回答の相関係数を見ても、添加物($r=.172, p<.001$)と牛の生食($r=.240, p<.001$)では正の相関が有意、カフェインでは負の相関($r=-.154, p<.001$)が有意であった。

この結果からは、知識量とリスク認知には関係があることが見いだされたものの、その方向は必ずしも一方向に結論づけられないことが示された。すなわち、食品に関して知識が増えればリスク認知が上がる、あるいは下がる、という議論は出来ない。知識量の効果について検討する際には、知識の内容を考慮する必要が示唆されている。

(4) 各象限(消費者クラスタ)ごとのリスク対処行動の特徴

消費者を知識量とリスク認知の大きさで以下の4クラスタに分類し、その行動傾向や特性を比較した。リスク認知の大きさの分類においては、4「どちらでもない」を含むデータを用いた。

なお、クラスター分析も実施したが、仮説通りに分類されなかったため、本研究では中央値による折半によって下記の4クラスタを作成した。

- Aクラスタ 知識少・リスク認知低
- Bクラスタ 知識少・リスク認知高
- Cクラスタ 知識多・リスク認知低

Dクラスタ 知識多・リスク認知高

食品添加物について(添付資料13参照)

食品添加物に関する分析では、「添加物は豊かな食生活に欠かせない」「食品添加物を避けている」において交互作用が有意、あるいは、有意傾向であった。知識が多くてリスク認知が低い人(Cクラスタ)は、他のクラスタよりも、添加物は豊かな食生活に欠かせないと考えていることが示された。また、知識が多くてリスク認知レベルが高い人(Dクラスタ)は、他のクラスタよりも、添加物を避けている傾向が見られた。

その他の質問項目では、リスク認知レベルの主効果が見られた。リスク認知レベルが低い人の方が、添加物の安全性はきちんと審査されていると考え、惣菜の購入頻度が高かった。

ファーストフード店の利用頻度については、クラスタごとの違いは見られなかった。

カフェインについて(添付資料14参照)

「コーヒーは豊かな食生活に欠かせない」「スターバックスの利用頻度」において、交互作用が有意、あるいは有意傾向であった。Cクラスタは、他のクラスタよりも、コーヒーを豊かな食生活に欠かせないと答えており、逆にBクラスタはその考え方に否定的な傾向がある。スターバックスの利用頻度は、有意傾向という弱い交互作用ではあるが、知識が豊富でリスク認知が高い人(Dクラスタ)が利用頻度が高いという結果になった。この結果については、なぜコーヒーが危険であると思う人ほどスターバックスをよく利用するのか、直感に合わない印象もある。しかし、「カフェインを避けている」と「スターバックス利用頻度」および「タリーズ利用頻度」の相関係数は、

$r=.96$ および $r=.13$ (ともに $p<.05$)で有意であり、シアトル系カフェの利用者は、必ずしもコーヒーを飲みに訪れているとは限らない様子が見て取れる。

コーヒー飲用頻度の分析では、リスク認知および知識量の主効果が有意である。コーヒー愛好家は知識が多くてリスク認知が低く、コーヒーを飲まない人は知識が乏しくてリスク認知が高いという傾向が示唆されている。この結果は、食の嗜好性がリスク認知に影響する様子を示している。すなわち、好きな食べ物を危険と思いたくないという心理の反映とも解釈できる。

その他、「コーヒーは健康に悪い」および「カフェインの安全性はきちんと審査されている」において、リスク認知レベルの高低による主効果が見られた。すなわち、カフェインを危険であると思っているほど、コーヒーは身体に悪く、また、安全性がきちんと審査されていないと感じていることが分かった。

牛の生食について(添付資料15参照)

牛の生食についての分析では、「牛の生食は豊かな食生活に欠かせない」「牛の生食を避けている」「生の牛肉の食用頻度」「焼き肉店の利用頻度」において、リスク認知レベルによる主効果が見られた。牛の生食を危険であると感じているほど、生の牛肉はなくても食生活が貧しくはならないと感じており、生の牛肉を避けていた。実際の食用頻度も低く、また、焼き肉店の利用も少ないことが分かった。

焼き肉店の利用については、知識量の主効果も得られた。すなわち、知識が多い方が少ないよりも、焼き肉店をよく利用していることが分かった。

牛の生食の分析結果においては、他の食品と比較して、食品リスクに関する知識量の影響があまりみられないという特徴がある。

リスク対処行動の結果のまとめ

すべての食品において、クラスタごとに実際のリスク対処行動に差異が認められることが示され、本実験に向けて、消費者を4つのクラスタに分類する手法の有効性が示唆されたと解釈できる。分析の結果、いずれの食品においても、リスク認知が高い場合に、その食品を摂取することを避けており(摂取頻度が低い)、豊かな食生活に必要なと考えている傾向が見られた。その一方で、知識量の影響については食品によって異なることが分かった。食品添加物は、知識がある人ほど摂取を避けているが、カフェインは知識がない人ほど摂取を避けている。牛の生食については、「生食を避けている」という回答では差が見られなかったものの、知識がある人ほど焼き肉店をよく利用する傾向があった。すなわち、知識量の効果は、その食品が好きだからこそ知識が豊富でリスク認知はあまり高くないというケースと、単に知識としてリスクに関する情報をいろいろ持っており可能な限り摂取を避けようとしているケースが混在しており、結果が見られにくくなっている可能性がある。

クラスタごとのパーソナリティの差異(添付資料16参照)

食品リスク認知において、パーソナリティの影響は小さくないと考えられる。すなわち、楽天的で何事も大雑把で人を信頼しやすい性格である場合と、慎重で疑り深い性格の場合では、リスク認知やその対処が異なってくるだろうと予測できる。

そこで、クラスタごとにパーソナリティを比較した。項目は、「健康管理に気を使っている」「何事も慎重に判断する方だ」「人と比べて楽天的な性格だ」「他人を信頼しない方だ」「食べることが好きである」「インターネット上のクチコミは信

用しない」であった。

結果は、食品添加物、カフェイン、牛の生食の3つの食品ごとに若干異なっていた。全体的な傾向から解釈すると、「健康管理に気を使っている」「何事も慎重に判断する」「他人を信頼しない」というパーソナリティを持つ人は、リスク認知が高いことが示された。また、「何事も慎重に判断する」「インターネット上のクチコミは信用しない」については、知識量が多い人に良く見られるパーソナリティであることも示された。

なお、「食べることが好きである」は、知識量もリスク認知レベルも共に有意であったが、カフェインでは食べることが好きであるほどリスク認知が低かったが、添加物と牛の生食では食べることが好きであるほどそれらのリスク認知が高かった。

以上の結果から、クラスタごとに消費者のパーソナリティが異なっていることが示され、リスク認知や対処行動に影響を与えている可能性が示唆された。本実験においては、パーソナリティを調整変数として考慮する必要があるだろう。

ウェブ行動に関する分析（添付資料17～20参照）

最後に、クラスタごとに普段のウェブ利用の実態について比較した。本実験においては、ウェブによるリスク情報の提示の効果を検討する予定である。どのメディアに情報を提供するのが有効かを検討するためにも、普段のウェブ利用の実態を明らかにしておくことが重要である。

ウェブの利用については、「インターネット上のニュース記事を毎日見ている」、「Facebookを利用している」、「Twitterを利用している」の3項目で、すべて「はい」「いいえ」で回答してもらった。以下の表は、食品添加物、カフェイン、牛の生食それぞれについて、クラスタごとに

回答者数をまとめたものである。知識量やリスク認知レベルによって、それぞれのメディアの利用割合は大きく異なっていることがわかる。

しかし、このクロス集計表からでは、知識量とリスク認知レベルの交互作用効果を検討することが出来ないため、実態を明らかにすることは難しい。そこで、「ニュースを毎日見ている」、「Facebookを利用している」、「Twitterを利用している」に対する回答（「はい」「いいえ」の2値）を被説明変数とし、ロジスティック回帰分析を行った。説明変数は、「リスク認知レベル」として「～は危険だと思う」への回答（7段階尺度）、および、知識量を示すものとして「正誤問題の正解数」を投入した。さらに、個人差として年齢と性別も投入した。

その結果、利用するメディアによって大きく結果が異なっていた。

まずインターネットのニュース記事の参照については、すべての食品において、テスト正解数が有意となった。つまり、食品リスクについて知識を多く持っている人は、インターネットで毎日ニュースを見ていることが分かった。リスク認知の高低、あるいは、年齢や性別は関連がなかった。

Facebookの利用については、食品リスクに関する知識やリスク認知レベルは有意にならなかった。一方で、年齢と性別が有意であり、若い人ほど、また、男性ほど、Facebookの利用者が多いことが分かった。

Twitterについては、Facebook同様、年齢が若いほど、また男性の方が利用者が多いことが分かった。同時に、リスク認知が高い人の方がtwitterをよく利用しているという傾向も示された。知識量については有意にならなかった。

以上の結果から、リスク情報の提供メディアとして、インターネットは有効である可能性が示唆されたと解釈できよ

う。食品リスクに関心が高い人たちが、インターネット上のニュースを情報源として活用しているという実態が明らかになったことで、そこで食品リスク情報を提供することの有効性が示されたと言える。また、今回の分析では、「知識量」や「リスク認知」をメディア利用を予測する変数として用いたが、実際には、インターネットでニュースをよく見ているから知識量が豊富である、リスク認知が高まる、という因果関係を想定することも可能である。ウェブで積極的に情報発信を行うことで、国民全体の食品リスクに関する知識レベルを底上げできる可能性もあるだろう。

Twitter に関しては、リスク認知レベルが高い人ほど良く利用しているという傾向が見られた。これは、添加物と牛の生食のリスクについてのみ見られた傾向であるが、カフェインで結果が得られなかったのは、上述の 2 つの食品に比べるとリスクレベルが小さいためであろうと考えられる。この結果からは、Twitter は社会的交流を目的として活用する人も多いと想定される一方で、ニュースサイトとしての重要な役割を持っており、特にリスクに敏感な消費者が知識の収集のために用いている可能性を示唆するものである。

一方で、Facebook については、食品リスク知識やリスク認知レベルと一切関連が見られなかった。このことは、Facebook はあくまで社会的交流を目的として活用されており、食品リスク情報の提供メディアとしての可能性は、現状では乏しいことを示唆するだろう。

2. 研究 2 (本実験)

ニュースサイトおよび SNS 上の食品リスク情報を参照することで、リスク認知がどう変化したかについて、統計的手法を用いて分析を行った。

以下、分析の手順に従って結果を報告

する。

-
- (1) リスク認知の測定方法
リスク認知測定の因子分析
下位尺度の合成
 - (2) セグメンテーションの実施
添加物に関する知識量について
添加物に関するリスク認知レベルについて
セグメントごとの特徴
(パーソナリティと SNS 利用)
 - (3) リスク情報の影響力
リスク回避的文章の効果について
リスク容認的文章の効果について
リスク回避文章と容認文章の比較
 - (4) その他
SNS の利用と知識量・リスク認知の相関関係
記事の精読率について
-

- (1) リスク認知の測定方法
リスク認知測定の因子分析
食品添加物に関するリスク認知レベルの測定のため、添加物を危険だと思うか、普段添加物を避けるためにコンビニの惣菜などを買わないようにしているか、添加物も少量ならば摂取しても大丈夫だと感じるか等、9項目で尋ねた(Time1)。また、食品リスク情報を提示した後でも、同様の質問をした(Time2)。Time1 と Time2 の 9 項目に対して、それぞれ因子分析(最尤法・プロマックス回転)を実施した。その結果を添付資料 2-1 に示す。因子分析の結果、第 1 因子として「リスク回避行動」(添加物の摂取を出来るだけ回避しようとする行動、第 2 因子として「リスク認知」(添加物摂取を危険だと感じること)、第 3 因子として「添加物容認態度」(少量ならば摂取に問題ないと感じること)の 3 因子が抽出された。因子構造は、Time1 および Time2 で全く同じであった。

下位尺度の合成

因子分析の結果に従い、各因子に負荷が高かったそれぞれ3項目の平均値を算出し、次の下位尺度を合成した。

- ・リスク認知(Time1) =0.898
- ・リスク容認態度(Time1) =0.777
- ・リスク回避行動(Time1) =0.967
- ・リスク認知(Time2) =0.903
- ・リスク容認態度(Time2) =0.79
- ・リスク回避行動(Time2) =0.977

(2) セグメンテーションの実施

添加物に関する知識量について

添加物に関する知識量を問うた正誤問題への回答の分布を確認したところ、13点満点中、平均点は4.66点であった。回答数の分布の詳細は添付資料22に示す通りである。正規分布に近い分散と判断できたため、中央値5点で折半して、得点5点以上を知識量が多い群、5点以下を知識量が少ない群とした。

添加物に関するリスク認知レベルについて

(1)で合成した下位尺度「リスク認知(Time1)」の分布を確認したところ、7点満点中平均値が4.61点であった。得点の分布の詳細は添付資料23に示す。中央値4.66点で折半して、得点4.66点以上をリスク認知が高い群、4.66点以下をリスク認知が低い群とした。

セグメントごとの特徴

知識量の多少とリスク認知レベルの高低に基づき、4つのセグメントに分類を行った。

- A クラスタ 知識少・リスク認知低
- B クラスタ 知識少・リスク認知高
- C クラスタ 知識多・リスク認知低
- D クラスタ 知識多・リスク認知高

各クラスタに割り振られた人数や男女比、平均年齢は、添付資料23に示す通りである。クラスタAで平均年齢がやや低めであるものの、特定のクラスタに特定の年齢・性別が集中するような大きな偏りはないことがわかった。

次に、ここで得られた4クラスタごとに、パーソナリティや普段からのSNSの利用状況などに違いがあるかを検討した。パーソナリティやSNSの利用頻度を尋ねた問いの答えに対して、クラスタの一要因4水準による分散分析を実施したところ、一部の項目で有意差が得られた。結果の詳細は添付資料25に示す。

まず、パーソナリティ項目については、リスク認知が高いクラスタ(BおよびD)において、リスク認知が低いクラスタ(AおよびC)と比べ、「周囲の人と比較して健康には気を使っている」「何事も慎重に判断している」「インターネット上の情報はあまり信用していない」の3項目の得点が高かった。健康に関心が高く、慎重で、ネット上の情報を信頼していない人たちはリスク認知が高いという傾向が示された。また、「学生の頃に数学が得意であった」「マスメディアの情報はあまり信用していない」という項目は、知識量が多いクラスタ(C/D)において知識量が少ないクラスタ(A/B)よりも得点が高かった。理数系でマスコミを信頼していない人ほど添加物に関する知識が豊富であった。最後に、「人と比較して楽天的な性格である」という項目においては、Aクラスタ(知識量少ない・リスク認知低い)が他のクラスタよりも得点が低い傾向にあった。一般的には、楽天的な性格であるとリスク認知が低くなるのではと予測されるが、結果は逆であった。この結果については、本実験で用いたパーソナリティ測定方法に問題があったと考えられる。楽天的な性格であることと、自らを人と比べて楽天的であると自覚し

ていることは、別である。最も添加物の知識が豊富でリスク認知が高かった層が自らを楽天的と評価していることから、この項目が実際に楽天的な性格かどうかを反映していなかった可能性を強く示唆する。

次に、SNSの利用状況とクラスタとの関連について検討した。「ブログを書いているかどうか」、および、代表的なSNSである「Facebook」「Twitter」「Instagram」「GREE」の利用頻度が、クラスタごとに異なるかどうかを比較したが、有意な差は見られなかった。しかし、「Yahoo!ニュース」と「Yahoo!知恵袋」については有意差が得られた。リスク認知が高いクラスタ（B/D）の人々は、リスク認知が低いクラスタ（A/C）の人々よりも、「Yahoo!ニュース」を頻繁に参照していることが分かった。また、知識が少なくリスク認知が低い人たちは、他のクラスタに比べ、「Yahoo!知恵袋」を利用していないことが分かった。以上の結果からは、Yahoo!ニュースや知恵袋の利用は、食品リスクに関する知識やリスク認知と関係があることが示唆された。比較的知識が豊富でリスク認知が高い人たちが、Yahoo!関連サービスをよく利用していることから、リスクコミュニケーションのプラットフォームとして、Yahoo!のようなポータルサイトが一定の役割を担える可能性が示唆されたと言える。その一方、FacebookやInstagramなどの対人交流を中心としたSNSは、リスクコミュニケーションにはあまり適さない可能性も示唆された。

（3）リスク情報の影響力

SNS上で提示されたリスク情報の影響力について、クラスタごとに比較を行った。前述の通り、提示したリスク情報には、「添加物摂取は危険である」というメッセージと、「添加物摂取は危険ではない」というメッセージの、2つの方向の

ものが用意された。これらはリスク認知に対して、逆方向の影響を持つものと考えられる。したがって以下では、リスク回避的記事（添加物は危険である）とリスク容認的記事（添加物は危険ではない）に分けて分析を行った。また、記事の掲載されていたプラットフォームとして、Facebookとニュースサイトがあった。したがって、実験参加者は「リスク回避記事・ニュースサイト」「リスク回避記事・Facebook投稿」「リスク容認記事・ニュースサイト」「リスク容認記事・Facebookサイト」の4種類のいずれかを参照した。

回答者のリスク認知レベルは、（1）において作成した3つの変数（リスク認知、リスク容認態度、リスク回避行動）によって検討する。この3つの値が、記事を読む前後でどのように変化したかを比較することで、記事の影響力の程度を検証した。

リスク回避的記事の効果について

A～Dクラスタそれぞれのリスク認知、リスク容認態度、リスク回避行動に対して、記事を読む前後（被験者内要因）×記事の掲載メディア（ニュースサイトor Facebook；被験者間要因）の2要因混合分散分析を行なった。その結果を添付資料26に示す。

まず、掲載メディアの影響はいずれのクラスタにおいても見られなかった（主効果および交互作用は非有意）。したがって、ニュースサイトとFacebookのどちらに掲載されていた記事であるかということによって、リスク情報の影響力に違いはないことが分かった。リスク情報の発信者は、Facebook条件では一般人、ニュースサイトでは、新聞記者と想定されるはずである。ニュースサイトの方が情報の信頼性が高く評価され、影響力も大きいことも予想されたが、実際には差は見られなかった。

次に、記事提示前後の「リスク認知」の得点の変化についてだが、もともとリスク認知が低い人（クラスAとC）において若干リスク認知得点が上昇したものの、リスク認知がもともと高かったクラスBおよびDにおいては有意な上昇は見られなかった。平均値を見ても天井効果は生じていないことから、リスク回避記事の内容は、もともとリスク認知が高い人にとっては、あまり危険性を喚起する内容になっておらず、彼らは自分自身の平素からの態度が正しいと確証するだけであった、と考えることも出来る。ただし、「リスク回避行動」については、リスク認知が低いクラスだけでなく、もともと高いクラスB・Dにおいても、有意な得点の上昇が見られた。すなわち、もともとリスク認知が高かった人にとっても、あらためて危険性を明示されると、「今よりもなお一層添加物の摂取を控えよう」という行動意図が形成されることが分かった。リスク容認態度については、クラスBで和すかに低下が見られたものの、有意な結果ではなかった。

以上の結果より、web上のリスク回避的メッセージの影響力は、それを読む人のもともとのリスク認知レベルによって異なることが示された。もともとリスク認知が低かった人においては、リスク回避的メッセージへの接触はリスク認知を高めてリスク回避行動を促進する効果があることが分かった。一方で、もともとリスク認知が高い人にとっては、リスク回避的メッセージは認知レベルではあまり効果を持っていないが、リスク回避的な行動については促進的な効果を持つ、ということがわかった。

リスク容認的記事の効果について

リスク容認的な記事の効果についても、リスク回避的記事と同様、2要因混合分散分析を実施した。その結果を、添付資料27に示す。

分析の結果、リスク回避的記事と異なり、メディアの違いによる効果が見られた。しかし、同じクラス内でも、ニュースサイトの方が影響力が大きい場合と小さい場合があり、この差がなぜ生じたかに説明をつけることは困難である。ただし、統計的には有意傾向差にとどまる項目が多く、また、ニュースサイト条件とFacebook条件で同じクラス内でもTime1時点のリスク認知レベルに差異があり、その影響で有意差が出てしまったとも解釈できる。したがってメディアによる影響力の差は、ほとんどみられなかった、と結論付けてもよいだろう。

記事を読む前後での「リスク認知」の変化を見てみると、興味深いことに、リスク認知が低く知識量が少ないクラスAにおいては、「添加物を食べても大丈夫だ」という記事を読んでもらったにもかかわらず、リスク認知が上昇していた。記事の内容は「少々摂取しても大丈夫である」というものであったが、それでもリスク認知が低い人にとっては、危険性を喚起する内容と認識されたのだろう。一方で、元々リスク認知が高かったクラスB・Dにおいては、リスク認知が低下し、リスク容認態度が上昇するという効果が見られた。また、「リスク容認態度」については、すべてのクラスにおいて容認的態度が高まるという強い影響力を持っていた。

また、「リスク回避行動」については、リスク回避記事の影響は大きかったが、リスク容認記事については、記事を参照したことによる有意な変化が見られず、行動意図よりも認知に影響を与えるということが分かった。

全体的に見て、知識が多くてリスク認知が低いクラスCがもっとも記事によって影響を受けにくかった。彼らにとっては、読んでもらった記事の内容が賛同できるもので、自分自身の事前態度にちかかったのであろう。

リスク回避記事と容認記事の比較

リスク回避記事とリスク容認記事の結果を見比べてみると、リスク容認記事において記事の提示前後で態度変容が生じる場合が高く見られた。したがって食品リスクコミュニケーションにおいては、危険性を訴える記事よりも、安全性を訴える記事の方が、読者に対して大きな影響を与える可能性が示唆された。この結果は、二つの解釈が可能である。ひとつは、もともと食品添加物については危険だと考える人が多く、「危険である」というリスク回避的メッセージよりも「安全である」というリスク容認的メッセージの方が、情報の新規性があり、影響力が大きかったという可能性である。しかしながら、この解釈については、リスク認知低クラスターのリスク認知の平均値が3.67～3.86と理論的中央値を下回っており、「もともと危険であると考えていたから」という説明は妥当ではないだろう。ふたつめの解釈は、選択的情報接触が生じたという可能性である。現代人は食品添加物を完全に避けて生活することは不可能である。そのようなものを、危険だと言われるよりも、安全だと言われた方が、認知的不協和を生じない。したがってリスク容認的メッセージの方が影響力が大きいという可能性である。

(4) その他

SNSの利用と知識量・リスク認知の相関関係(添付資料28)

本研究では、ニュースサイトおよびSNS上のリスク情報の影響力について検証を行ったが、現状、SNSをよく利用する人は食品リスクについてどのような認識を持っているのだろうか。SNSを使用すればするほど知識が増えたり、リスク認知が高まったりするのか、あるいは、リスク認知が高い人や知識が多い人がSNSを良く利

用するのか、双方向の影響が想定されるため、ここでは因果関係については議論できない。しかし、今後の研究への参考資料として、SNSの利用頻度とリスク認知・知識量の関係を調べた。

分析対象としたSNSは、近年若年層を中心に利用者が多い「Facebook」「Twitter」「Instagram」「GREE」である。また、これに関連し、「Yahoo!」のニュースサイト、「Yahoo!知恵袋」、スマホ利用、ブログ執筆についても質問した。

その結果、すべてのSNS利用頻度と「添加物容認態度」の間に有意な相関がみられた。スマホ利用、Yahoo!知恵袋利用頻度とも相関が有意であった。このことから、SNS利用者は「添加物は少なからず食べても大丈夫である」という認識が高いことが分かった。しかし、その態度と逆の方向である、添加物を危険だと感じる「リスク認知」の変数では、SNSではInstagramのみが有意となり、ほとんどのSNSとの関連が見られなかった。SNSの利用頻度は、若年であるほど高いので、この相関関係には年齢の媒介効果が存在していると考えられる。一方、リスク認知、知識量、容認的態度すべてと強い関係を持っていたのが「Yahoo!知恵袋」である。「Yahoo!知恵袋」をよく利用する人は、リスク認知が高く、知識が多く、容認的態度も高いということが分かった。前述の通り、因果関係については議論できないが、この結果は、様々なSNS、ウェブサービスの中で、「Yahoo!知恵袋」がもっとも食品リスク認知に適したプラットフォームであることを示唆する結果である。少なくとも、食品リスクに関心が高いと思われる層が、情報を求めて「Yahoo!知恵袋」を訪れていることがわかる。

記事の精読率について

本実験はウェブ上で実施されたため、実験参加者が、提示した記事をどれくらい熱心に読んでいたかは不明である。記事をよく読んでから質問紙進むように指示をしたものの、現実には記事をあまり読まずに質問に回答することも可能であった。

そこで、実験で提示した記事を指示通り精読したかをチェックするため、内容に関する正誤問題を用意した。添付資料29と30に、リスク回避的文章、リスク容認文章それぞれの正誤問題の正答数を示す。

正誤問題は、文章をきちんと読めばすべて正答できるように作っていたが、いずれの記事でも、正答率50%程度の実験参加者が最も多いという結果であった。

念のため、記事を精読していなかった実験参加者（正答率が40%以下）をサンプルから除外して、クラスタの設定や分散分析等を行ったが、条件ごとのサンプル数が少なくなってしまう、統計的分析が実施できなかった。したがって、本研究では、すべての実験参加者のデータを分析に用いた。

精読率が著しく低かったという結果は、インターネット調査の問題でもあるが、一般的に言って、人々の食品リスクへの関心が低いことも示している。ネット上の食品リスクコミュニケーションを考える際には、同時に食品リスクへの関心を高める施策も必要であろう。

D. 結論

本研究結果より、以下の結論が導かれた。

(1) インターネット上での食品リスク情報提供においては、マスメディアによるニュースサイトであっても、個人のブログの記事で

あっても、同程度の影響力を有する。

(2) 食品リスクに関する情報に接触した際の反応は、当該人物の「食品に対するリスク認知レベル」、および、「食品リスクに関する知識量」によって異なる。

食品の危険性を訴えかける記事を参照した場合、もともと食品リスク認知が高かった人はあまり影響を受けず、食品リスク認知の低かった人のみが影響を受ける。一方、行動意図レベルで見ると、事前のリスク認知レベルに関わらず、リスク記事の参照によって当該食品の摂取を避けようという意識が高まる。ただし、リスクに関する知識が多く、リスク認知が低い人達は、豊富な知識に基づいて食品を危険ではないと考えているので、新しい情報によってすぐ行動を変えようとは考えない傾向がある。

食品の安全性を訴えかける記事を参照した場合、危険性を訴えかける記事を参照した場合よりも態度変容を起こす人が多く、影響力が大きい。とりわけ、知識量が少なくてもリスク認知が低い人たちに影響量が大きく、リスク食品の摂取を控えようという行動意図も減少するほどの影響がある。その他のクラスタは、リスク認知レベルは低下するものの、リスク食品を避けようとする行動意図には変化がない。

(3) 食品リスク情報を提供するオンラインサービスとして、最も可能性が大きいのは「Yahoo!ニュース」および「Yahoo!知恵袋」である。年齢や性別など、その他の

要因を考慮した上でも、これらのサービスの利用とリスク認知およびリスク知識量には有意な相関がみられ、因果関係は特定できないものの、人々がこれらのサービスをリスク情報を得るために積極的に利用していることは確かである。一方、Facebook や Twitter、個人ブログは、対人交流を目的として使用されているため、リスク情報の提供には適さない。

最後に、以上の結果は、「食品添加物」という食品リスクを取り上げた実験の結果であり、その他の食品のリスクにすべてそのままあてはまるかどうかについては、慎重に検討する必要があることを付記しておく。

E. 健康危険情報

該当なし

F. 研究発表

杉谷陽子 2014 リスク情報の影響に関する検討：行動意図と実際の行動の乖離について 第 55 回日本社会心理学会大会（北海道大学 7 月）

杉谷陽子 2015 食品リスクコミュニケーションにおけるソーシャルメディアの活用について 産業・組織心理学会第 117 回部門別研究会消費者行動部門（招待講演）（筑波大学 5 月）

杉谷陽子 2015 SNS を用いた食品リスク・コミュニケーションの研究：知識量とリスクへの態度によるセグメンテーションの可能性 産業・組織心理学会第 31 回大会（明治大学 8 月）

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

添付資料 1

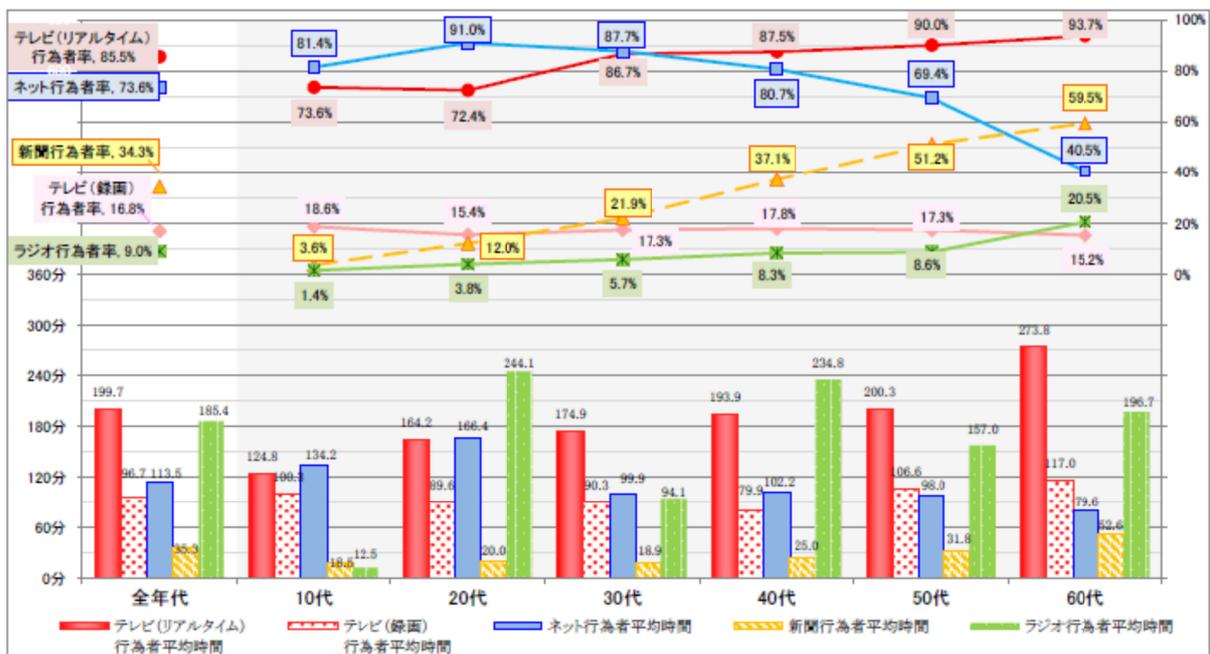


図1 平成26年[平日1日]主なメディアの行為者率・行為者平均時間(全年代・年代別)

総務省情報通信政策研究所(2015)「平成26年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」http://www.soumu.go.jp/main_content/000357570.pdf (2015年5月19日更新、2016年1月1日アクセス)

添付資料 2

	全年代(N=1500)	10代(N=140)	20代(N=221)	30代(N=281)	40代(N=303)	50代(N=255)	60代(N=300)
LINE	55.1%	77.9%	90.5%	69.8%	63.4%	37.3%	11.3%
Facebook	28.1%	25.0%	61.1%	39.9%	23.8%	19.6%	6.0%
Twitter	21.9%	49.3%	53.8%	21.4%	14.9%	10.6%	2.7%
mixi	8.1%	3.6%	20.4%	13.2%	6.3%	3.1%	2.3%
Mobage	8.6%	10.7%	19.0%	12.5%	8.6%	2.0%	2.0%
GREE	6.9%	7.1%	12.2%	9.6%	7.3%	3.9%	2.3%
Google+	22.5%	30.7%	24.4%	25.6%	28.1%	20.8%	10.0%
YouTube	65.1%	83.6%	89.1%	82.9%	75.9%	50.2%	24.0%
ニコニコ動画	19.1%	31.4%	40.7%	18.5%	17.2%	13.7%	4.7%
Vine	1.9%	10.0%	3.2%	1.1%	1.7%	0.0%	0.0%
7つのいずれか利用	65.0%	79.3%	95.5%	84.0%	73.6%	50.6%	21.7%
6つのいずれか利用 (Google+除く)	62.3%	78.6%	95.0%	82.6%	70.3%	45.9%	17.3%
10のいずれか利用 (動画系の3つ含む)	74.1%	88.6%	97.3%	91.1%	85.8%	63.9%	31.0%

図2 平成26年主なソーシャルメディアの利用率(全年代・年代別)

総務省情報通信政策研究所(2015)「平成26年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」http://www.soumu.go.jp/main_content/000357570.pdf
(2015年5月19日更新、2016年1月1日アクセス)

添付資料3 研究1の調査票

質問の提示順は、下記の6パターンが用意されていた。

- A B C 一般
- A C B 一般
- B A C 一般
- B C A 一般
- C A B 一般
- C B A 一般

A - 1

次に示す文章は、「食品添加物」について説明したものです。

あなたが知っていることと照らし合わせて、これらの文章が正しいと思った場合には「正しい」の欄にチェックを、これらの文章を誤りであると思った場合には「正しくない」の欄にチェックを入れてください。

また、これまでに聞いたことがない、わからない場合には、「わからない・知らない」の欄にチェックを入れてください。

- 1) 食品添加物とは、食品に含まれる保存料や着色料、甘味料のことである。
- 2) 食品添加物は、人工的に合成されたものである。
- 3) 食品添加物の中でも、食品の製造工程で使用されたとしても、食品に残存しない添加物については、パッケージに表示する必要はない。
- 4) 米国で使用が許可されている食品添加物の種類は、日本よりも多い。
- 5) 食品添加物の安全性は、食品安全委員会によって審査されている。
- 6) 甘味料「アスパルテーム」の成人の1日当たりの摂取許容量は約2000mgである。
- 7) 「バニラ香料」は食品添加物ではない。
- 8) 「ソルビン酸」は、食品の保存性を高める食品添加物である。
- 9) 「エリソルビン酸ナトリウム」は、ハムなどの色をよく見せるために使われる発色剤である。
- 10) 「L-グルタミン酸ナトリウム」は、うまみ成分の調味料である。
- 11) 戦後、食品添加物による死亡事故が起きたことはない。
- 12) 「L-アスコルビン酸」とはビタミンCのことである。
- 13) 「コチニール色素」は、清涼飲料水や菓子に使われる青色着色料である。
- 14) 「イマザリル」は、かんきつ類にしようされる防かび剤である。
- 15) 「キシリトール」は、チューインガムなどに用いられる甘味料である。

以上、すべて3択

「2.正しい」「1.正しくない」「0.わからない・知らない」

A - 2

ここからはあなた自身について伺います。

次の文章を読んで、普段のあなたの気持ちや行動にあてはまるところに、チェックを入れてください。

- 1) 食品添加物を摂取することは、危険であると思う。
- 2) 食品添加物の安全性は、きちんと審査されていると思う。
- 3) 食品添加物は、豊かな食生活には欠かせないと思う。
(以上、すべて7段階尺度 「7. 大変そう思う」「6. そう思う」「5. どちらかと言えばそう思う」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばそう思わない」「2. そう思わない」「1. 全くそうは思わない」)

- 4) 食品添加物の摂取を出来るだけ避けている。
「7. 大変あてはまる」「6. あてはまる」「5. どちらかと言えばあてはまる」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばあてはまらない」「2. あてはまらない」「1. 全くあてはまらない」

- 5) ふだん、コンビニやスーパーで惣菜を購入しますか？
「5. ほぼ毎日購入する」「4. 2～3日に1回程度購入する」「3. 1週間に1回程度購入する」「2. 月に数回程度購入する」「1. ほとんど購入しない」

- 6) ファーストフード店を利用しますか？ 「5. ほぼ毎日利用する」「4. 2～3日に1回程度利用する」「3. 1週間に1回程度利用する」「2. 月に数回程度利用する」「1. ほとんど、あるいは、全く利用しない」

B - 1

次に示す文章は、「カフェイン」について説明したものです。

あなたが知っていることと照らし合わせて、これらの文章が正しいと思った場合には「正しい」の欄にチェックを、これらの文章を誤りであると思った場合には「正しくない」の欄にチェックを入れてください。

また、これまでに聞いたことがない、わからない場合には、「わからない・知らない」の欄にチェックを入れてください。

- 1) 飲料100ml当りに含まれるカフェイン量は、紅茶よりもコーヒーの方が多い。
- 2) 「ブルーマウンテン」は、ジャマイカで生産される特定銘柄である。
- 3) スコットランドの研究室で誕生した、空気圧を利用したコーヒーの入れ方を、サイフォンと言う。
- 4) コーヒー豆とは、コーヒーの木となる実のことである。
- 5) コーヒーは多量のポリフェノールを含んでおり、その中にクロロゲン酸も含まれる。
- 6) コーヒーに含まれるカフェインには、覚せい作用(眠気さまし)がある。

- 7) コーヒーに含まれるカフェインには、血管拡張効果がある。
- 8) コーヒーに含まれるカフェインには、副交感神経を活性化する作用がある。
- 9) コーヒーに含まれるカフェインには、胃酸分泌を抑制する作用がある。
- 10) コーヒーに含まれるカフェインには、利尿作用がある。
- 11) コーヒーに含まれるカフェインには、筋弛緩作用がある。
- 12) カフェインは、脂溶性が高い。
- 13) コーヒーからカフェインを抜く代表的な技術として、有機溶媒抽出(ケミカルメソッド)と水抽出(ウォーターメソッド)がある。

以上、すべて3択

「2.正しい」「1.正しくない」「0.わからない・知らない」

B - 2

ここからはあなた自身について伺います。

次の文章を読んで、普段のあなたの気持ちや行動にあてはまるところに、チェックを入れてください。

- 1) コーヒーを摂取することは、健康に良くないと思う。
- 2) カフェインを摂取することは、健康に良くないと思う。
- 3) カフェインの安全性は、きちんと審査されていると思う。
- 4) コーヒーは、豊かな食生活には欠かせないと思う。
(以上、すべて7段階尺度 「7. 大変そう思う」「6. そう思う」「5. どちらかと言えばそう思う」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばそう思わない」「2. そう思わない」「1. 全くそうは思わない」)
- 5) カフェインの摂取を出来るだけ避けている。
「7. 大変あてはまる」「6. あてはまる」「5. どちらかと言えばあてはまる」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばあてはまらない」「2. あてはまらない」「1. 全くあてはまらない」
- 6) ふだんコーヒーをどれくらいの頻度で飲みますか？
「5. ほぼ毎日」「4. 2～3日に1回程度」「3. 1週間に1回程度」「2. 月に数回程度」「1. ほとんど、あるいは、全く飲まない」
- 7) コーヒー(カフェラテ等含む)を飲むために、スターバックス(Starbucks)を利用しますか？
「5. ほぼ毎日利用する」「4. 2～3日に1回程度利用する」「3. 1週間に1回程度利用する」「2. 月に数回程度利用する」「1. ほとんど利用しない」
- 8) コーヒー(カフェラテ等含む)を飲むために、タリーズコーヒー(Tully's coffee)を利用しますか？
「5. ほぼ毎日利用する」「4. 2～3日に1回程度利用する」「3. 1週間に1回程度利用する」「2. 月に数回程度利用する」「1. ほとんど利用しない」

C - 1

次に示す文章は、「生の牛肉」について説明したものです。

あなたが知っていることと照らし合わせて、これらの文章が正しいと思った場合には「正しい」の欄にチェックを、これらの文章を誤りであると思った場合には「正しくない」の欄にチェックを入れてください。

また、これまでに聞いたことがない、わからない場合には、「わからない・知らない」の欄にチェックを入れてください。

- 1) 生の牛肉には腸炎ビブリオ菌が含まれている。
- 2) 生の牛肉には腸管出血性大腸菌が含まれている。
- 3) 生の牛肉にはカンピロバクターが含まれている。
- 4) 牛の肝臓（レバー）は、飲食店等での生での提供は禁止されている。
- 5) 牛の肝臓（レバー）以外の部位は、飲食店等での生での提供は禁止されていない。
- 6) 生の牛肉に含まれる菌は、75 で1分間以上の加熱により死滅する。
- 7) 衛生管理が徹底された施設で加工・調理をすれば、牛の生食によって食中毒が起きることはない。
- 8) 牛の生食によって食中毒を起こした場合、人は死に至る危険がある。
- 9) 生の牛肉を電子レンジで加熱しても、食中毒を起こす菌は死滅しない。
- 10) 牛の生食による食中毒では、菌が人から人へ感染することもある。

以上、すべて3択

「2.正しい」「1.正しくない」「0.わからない・知らない」

C - 2

ここからはあなた自身について伺います。

次の文章を読んで、普段のあなたの気持ちや行動にあてはまるところに、チェックを入れてください。

- 1) 生の牛肉を摂取することは、危険であると思う。
- 2) 生の牛肉の安全性は、きちんと審査されていると思う。
- 3) 牛肉を生で食べることは、豊かな食生活には欠かせないと思う。
(以上、すべて7段階尺度 「7. 大変そう思う」「6. そう思う」「5. どちらかと言えばそう思う」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばそう思わない」「2. そう思わない」「1. 全くそうは思わない」)
- 4) 生の牛肉の摂取を出来るだけ避けている。
「7. 大変あてはまる」「6. あてはまる」「5. どちらかと言えばあてはまる」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばあてはまらない」「2. あてはまらない」「1. 全くあてはまらない」

5) ふだん、牛肉を生で食べますか？

「5.ほぼ毎日食べる」「4.2～3日に1回程度食べる」「3.1週間に1回程度食べる」
「2.月に数回程度食べる」「1.ほとんど、あるいは、全く食べない」

6) ふだん、焼き肉店を利用しますか？ 「5.ほぼ毎日利用する」「4.2～3日に1回程度利用する」「3.1週間に1回程度利用する」「2.月に数回程度利用する」「1.ほとんど、あるいは、全く利用しない」

一般

最後に、あなた自身について伺います。

次の文章を読んで、普段のあなたの気持ちや行動にあてはまるところに、チェックを入れてください。

1) 周囲の人と比較して、健康管理には気を使っている方である。

2) 周囲の人と比較して、健康維持には関心が高い方だ。

3) 何事も慎重に判断するようにしている。

4) 人と比較して、楽天的な性格である。

5) 他人をあまり信頼しない方である。

6) 食べることが好きである。

7) インターネット上のクチコミ情報はあまり信用していない。

(以上すべて、7段階尺度「7.大変あてはまる」「6.あてはまる」「5.どちらかと言えばあてはまる」「4.どちらとも言えない」「3.どちらかといえばあてはまらない」「2.あてはまらない」「1.全くあてはまらない」)

8) インターネット上のニュース記事を毎日見ている。

9) Facebook を利用している。

10) Twitter を利用している。

(以上、「2.はい」「1.いいえ」)

正誤問題は、以下のサイトを参考に作成された。

厚労省ウェブサイト

<http://www.mhlw.go.jp/>

東京都福祉保健局ウェブサイト

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shokuhin/index.html>

日本食品添加物協会ウェブサイト

<http://www.jafaa.or.jp/tenkabutsu01/index.html>

日本コーヒー協会ウェブサイト

<http://coffee.ajca.or.jp/>

質問紙 (Time1)

問 1

次に示す文章は、国内における「食品添加物」について説明したものです。

あなたが知っていることと照らし合わせて、これらの文章が正しいと思った場合には「正しい」の欄にチェックを、これらの文章を誤りであると思った場合には「正しくない」の欄にチェックを入れてください。

また、これまでに聞いたことがない、わからない場合には、「わからない・知らない」の欄にチェックを入れてください。

- 1) 食品添加物とは、食品を作ったり、加工したり、保存したりするときに使用する保存料、着色料、甘味料などの総称である。
- 2) 食品添加物は、化学的に合成されたものであり、豆腐を固める際に使用されるにがりのようなものは含まれない。
- 3) 「バニラ香料」のように動植物から得られる香料は食品添加物にあたらぬ。
- 4) 防かびの目的で収穫後の農産物に使用されるものは、添加物として扱われている。
- 5) 食品の製造工程で使用されたとしても、最終食品に残存しない添加物など食品のパッケージに表示する必要がない添加物がある。
- 6) 食品添加物に係るリスク評価は、食品安全委員会により、リスク管理は厚生労働省で行われている。
- 7) 戦後、食品添加物による死亡事故が起きたことはない。
- 8) 「ソルビン酸」は、ハムなどの色をよく見せるために使われる発色剤である。
- 9) 「L-グルタミン酸ナトリウム」は、うまみ成分の調味料である。
- 10) 「キシリトール」は、チューインガムなどに用いられる甘味料である。
- 11) 米国で使用が認められている食品添加物は、国内の規制に関わらず、使用することができる。
- 12) すべての食品添加物は、使用できる食品の種類が決められている。
- 13) 食品添加物の用途名の表示（甘味料、着色料、保存料など）は、全て事業者の任意で表示するか決めることができる。

以上、すべて3択

「2.正しい」

「1.正しくない」

「0.わからない・知らない」

問 2

ここからはあなた自身について伺います。

次の文章を読んで、普段のあなたの気持ちや行動にあてはまるところに、チェックを入れてください。

- 1) 食品添加物を摂取することは、種類に関わらず、危険であると思う。
- 2) 食品添加物がたくさん使われている食品は、危険であると思う。
- 3) 食品添加物の安全性は、きちんと審査されていると思う。
- 4) 食品添加物は、豊かな食生活には欠かせないと思う。
- 5) 食品添加物の摂取を出来るだけ避けたいと思う。
- 6) 少量であれば、食品添加物を摂取することは問題ないと思う。
- 7) 食品添加物が気になるので、コンビニで弁当を買うことは避けている。
- 8) 食品添加物が気になるので、コンビニでサンドイッチを買うことは避けている。
- 9) 食品添加物が気になるので、コンビニで菓子パンを買うことは避けている。

(以上、すべて7段階尺度 「7. 大変そう思う」「6. そう思う」「5. どちらかと言えばそう思う」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばそう思わない」「2. そう思わない」「1. 全くそうは思わない」)

質問紙 (Time2)

問 1

先程の記事を読んで、**今のあなたの気持ちや行動にあてはまる**ところに、チェックを入れてください。

- 1) 食品添加物を摂取することは、種類に関わらず、危険であると思う。
- 2) 食品添加物がたくさん使われている食品は、危険であると思う。
- 3) 食品添加物の安全性は、きちんと審査されていると思う。
- 4) 食品添加物は、豊かな食生活には欠かせないと思う。
- 5) 食品添加物の摂取を出来るだけ避けたいと思う。
- 6) 少量であれば、食品添加物を摂取することは問題ないと思う。
- 7) 食品添加物が気になるので、コンビニで弁当を買うことは避けようと思う。
- 8) 食品添加物が気になるので、コンビニでサンドイッチを買うことは避けようと思う。
- 9) 食品添加物が気になるので、コンビニで菓子パンを買うことは避けようと思う。

(以上、すべて7段階尺度 「7. 大変そう思う」「6. そう思う」「5. どちらかと言えばそう思う」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえばそう思わない」「2. そう思わない」「1. 全くそうは思わない」)

問 2

先ほど読んでいただいた記事の印象について伺います。

- 1) 先ほどの記事の内容は、信頼できると思いましたが。
(「7. 大変信頼できると思う」「6. 信頼できると思う」「5. どちらかと言えば信頼できると思う」「4. どちらとも言えない」「3. どちらかといえば信頼できないと思う」「2. 信頼できないと思う」「1. 全く信頼できないと思う」)
- 2) 先ほどの記事の結論に、あなたは賛成ですか。
(「4. 賛成である」「3. どちらかといえば賛成である」「2. どちらかといえば反対である」「1. 反対である」)

問3は、提示した記事に応じて2パターンであった

問3（提示された記事が「リスク回避的条件」だった回答者用）

以下の文章を読み、先ほどの記事の中に書かれていた内容には、書かれていなかった内容には×をつけてください。

- 1) pH調整剤には高い毒性があることが動物実験で明らかになった。
- 2) コンビニの菓子パンは出来るだけ食べるのを避けた方がいい。
- 3) pH調整剤は、使用量に制限がないためコンビニにとって都合がいい添加物である。
- 4) 保存料には発がん性の不安を感じている消費者が多い。
- 5) 正しい知識を持てば、食品添加物を恐れる必要はない。
- 6) 食品メーカーの「リン酸塩隠し」が巧妙化している。
- 7) 「混ぜ屋」と呼ばれる食品添加物メーカーがある。
- 8) 子供は特に食品添加物には気を付けた方がいい。

問3（提示された記事が「リスク容認的条件」だった回答者用）

以下の文章を読み、先ほどの記事の中に書かれていた内容には、書かれていなかった内容には×をつけてください。

- 1) 「添加物が怖いからコンビニパンを食べない」と言うのは、「交通事故が怖いから外出しない」と言っているようなものである。
- 2) 日本の消費者は、欧米と比較して、食品添加物に過敏である。
- 3) 日本人は、平均して年間で赤ちゃんの頭の大きさほどの量の食品添加物を摂取しているといわれている。
- 4) 自作農園で作った野菜は、絶対に安全である。
- 5) 猛毒と恐れられている亜硝酸ナトリウムも、元々は岩塩の中に多く含まれている成分である。
- 6) 食品添加物の名前の印象から、「気持ちが悪い」と考えるのは単なる感情論で、文明人として避けるべきである。
- 7) 動物実験のデータは人間には必ずしもあてはまらないので、ニュースなどで取り上げられていることを鵜呑みにしないほうが良い。
- 8) 食品添加物に関して正しい知識を持っている人は、添加物をむやみに怖がったりはしないものである。

問 4

最後に、普段のあなた自身について伺います。

次の文章を読んで、普段のあなたの気持ちや行動にあてはまるところに、チェックを入れてください。

- 1) 周囲の人と比較して、健康管理には気を使っている方である。
- 2) 何事も慎重に判断するようにしている。
- 3) 学生の頃、数学は得意な方であった。
- 4) 人と比較して、楽天的な性格である。
- 5) 他人をあまり信頼しない方である。
- 6) 地図を見ながら、初めて行く場所にたどり着くことは苦手である。
- 7) インターネット上の情報はあまり信用していない。
- 8) マスメディアの情報はあまり信用していない。

(以上すべて、7段階尺度

「7.大変あてはまる」「6.あてはまる」「5.どちらかと言えばあてはまる」「4.どちらとも言えない」「3.どちらかといえばあてはまらない」「2.あてはまらない」「1.全くあてはまらない」)

- 9) スマートフォンを使用している。
 - 10) 自分のブログを書いている。
- (以上、「はい」「いいえ」)

- 11) 次に示すオンライン上のサービスの利用頻度について教えてください。

Facebook

Twitter

Instagram

GREE

Yahoo!ニュース

Yahoo!知恵袋

(以上すべて、5段階尺度

「5.毎日、あるいは、ほぼ毎日利用している」「4.2～3日に1度くらい利用している」「3.1週間に1度くらい利用している」「2.たまにしか利用していない」「1.利用していない、利用したことがない」)

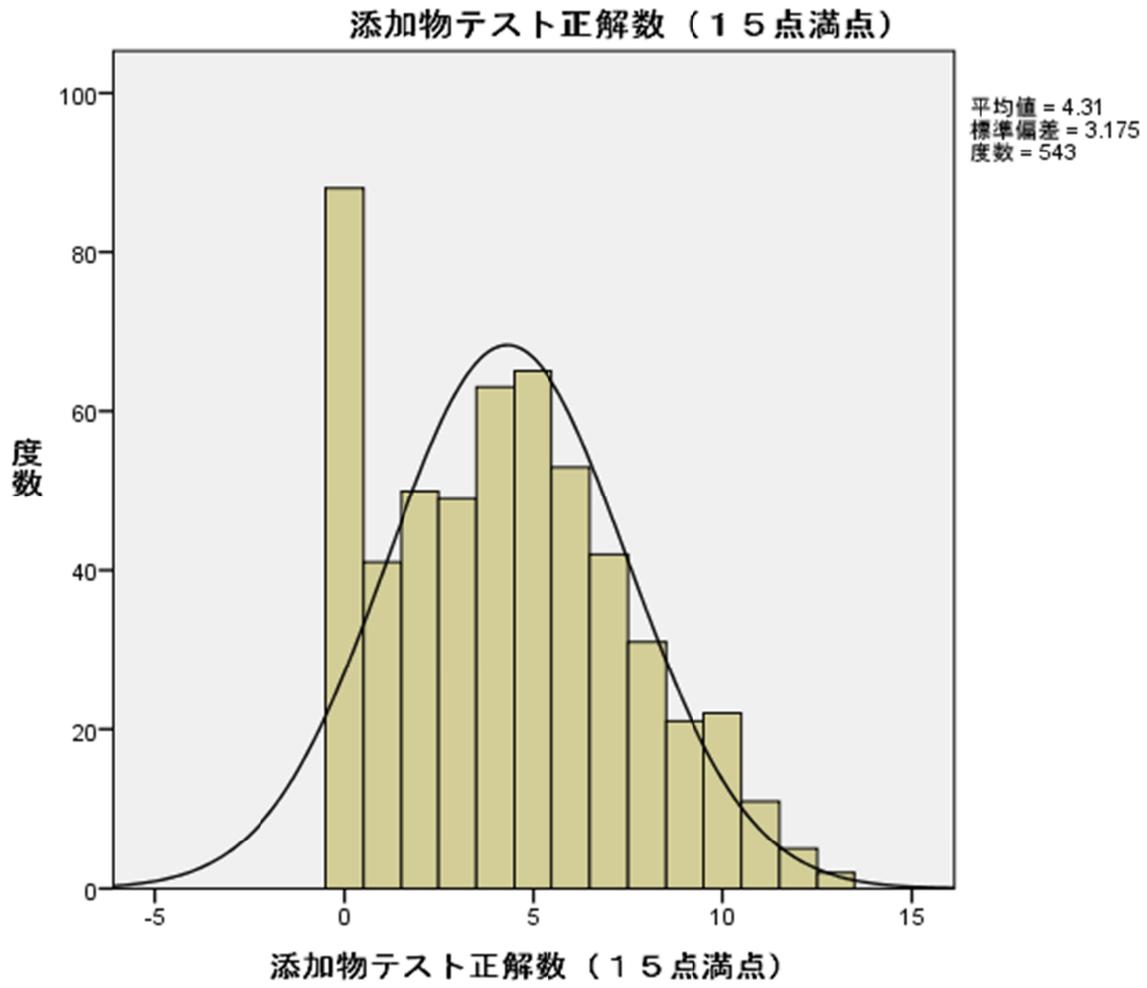


図3 正誤問題テスト正解数分布（食品添加物）

添付資料 6

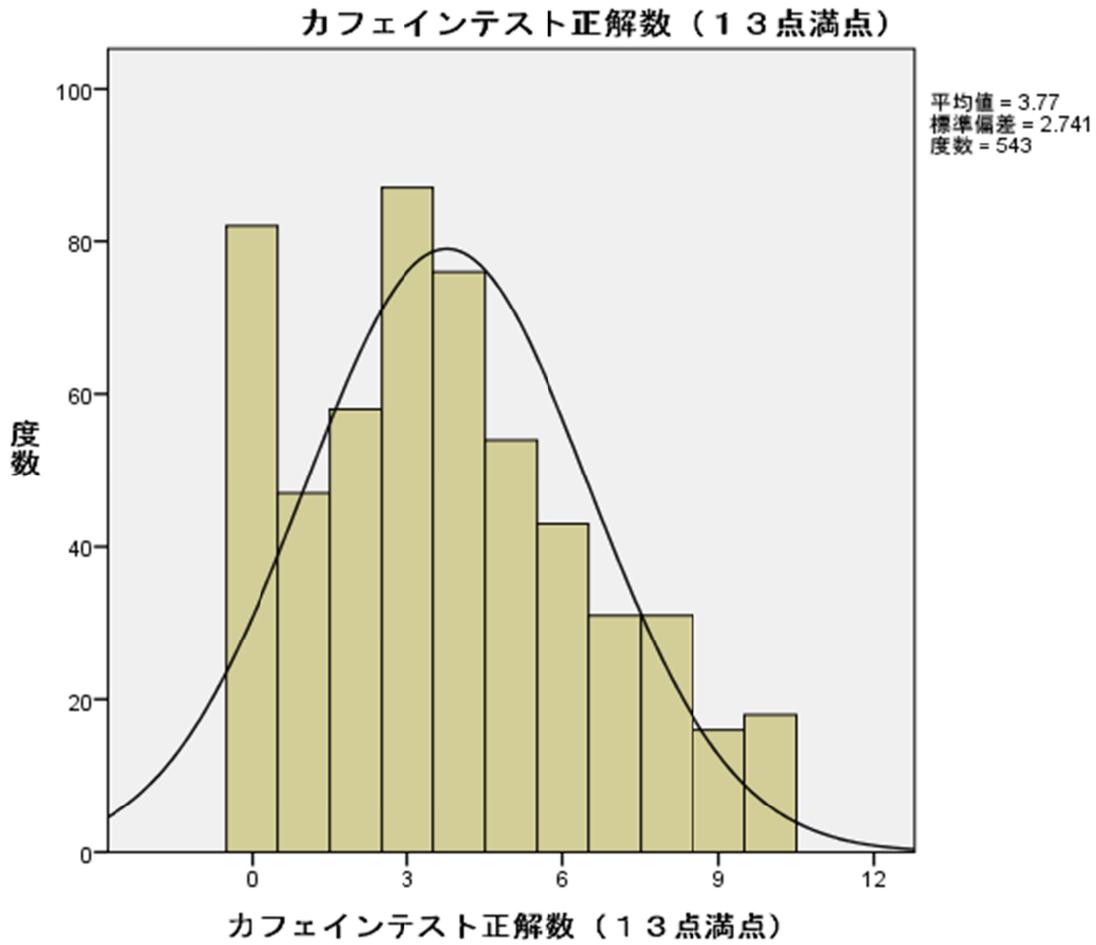


図 4 正誤問題テスト正解数分布（カフェイン）

添付資料 7

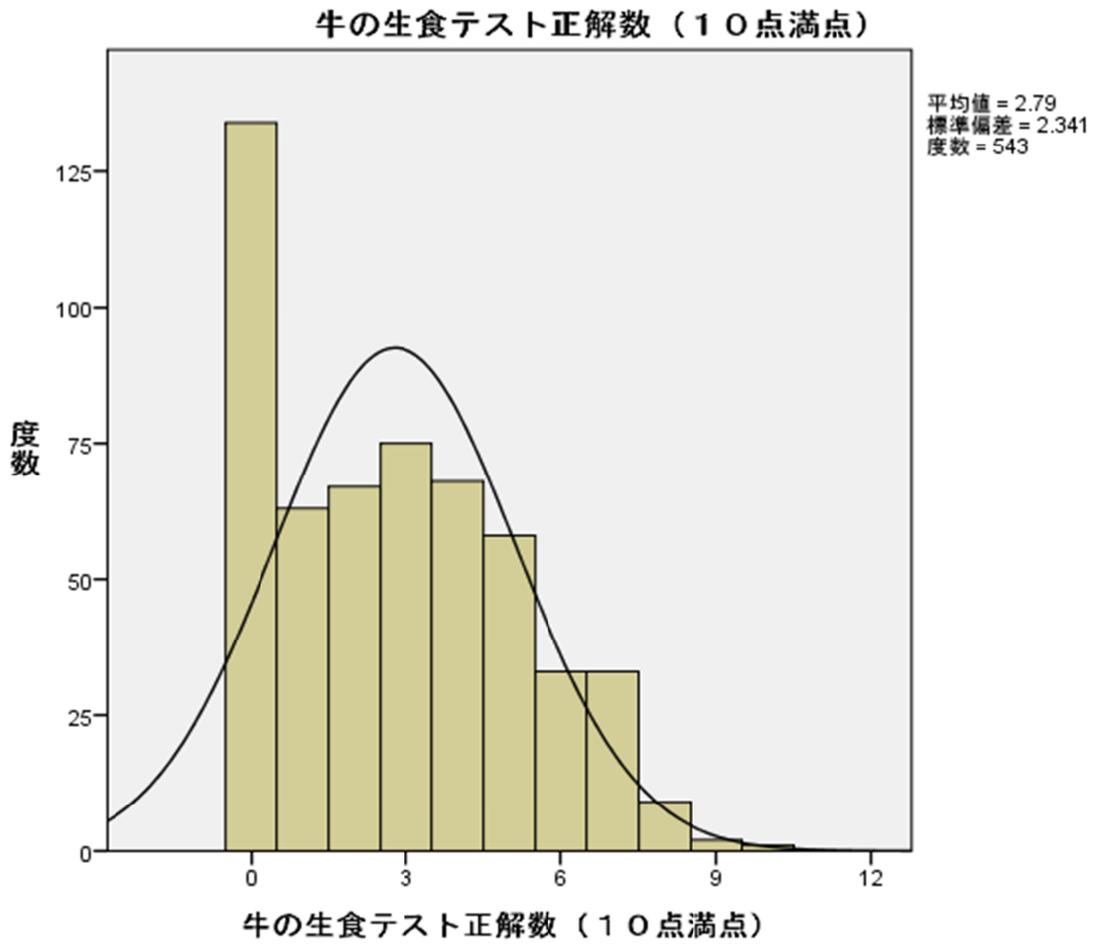


図 5 正誤問題テスト正解数分布（牛の生食）

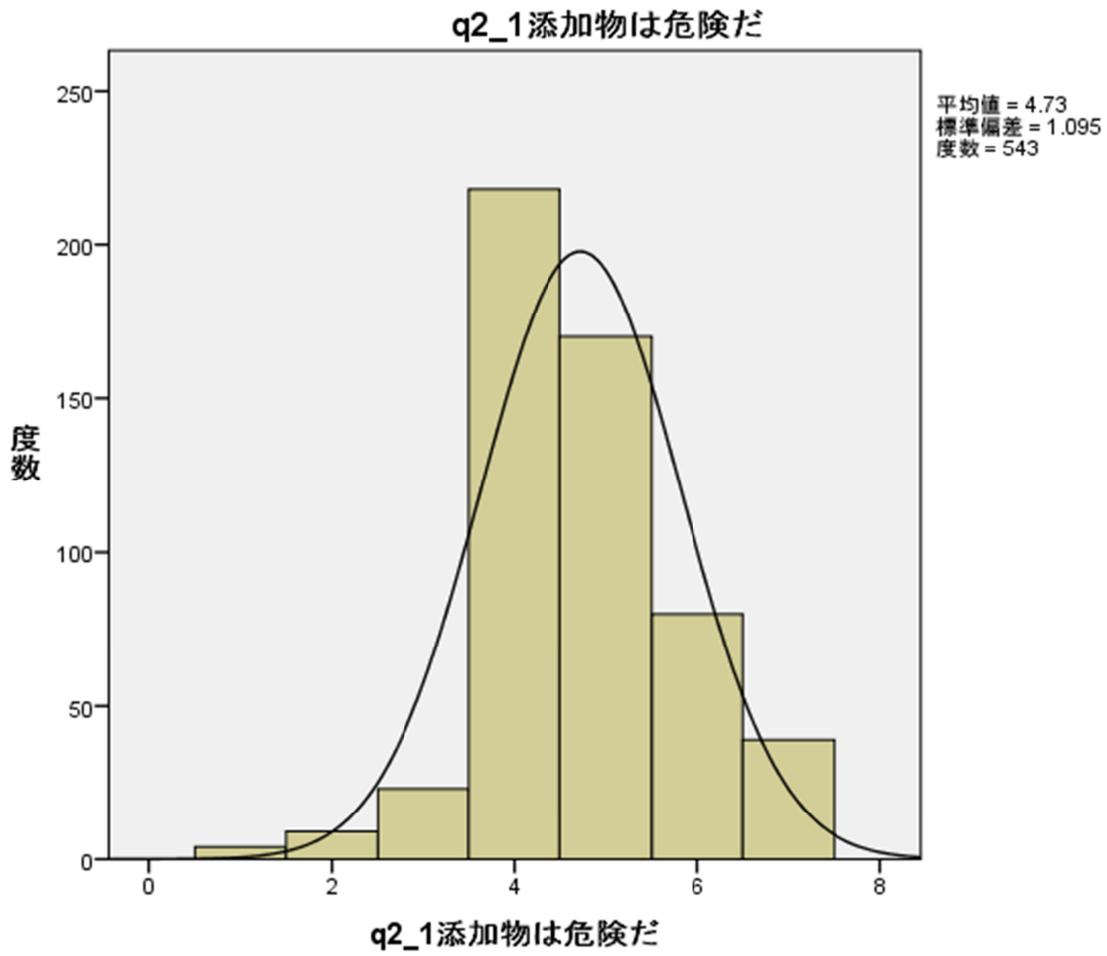


図 6 リスク認知の回答分布（食品添加物）

添付資料 9

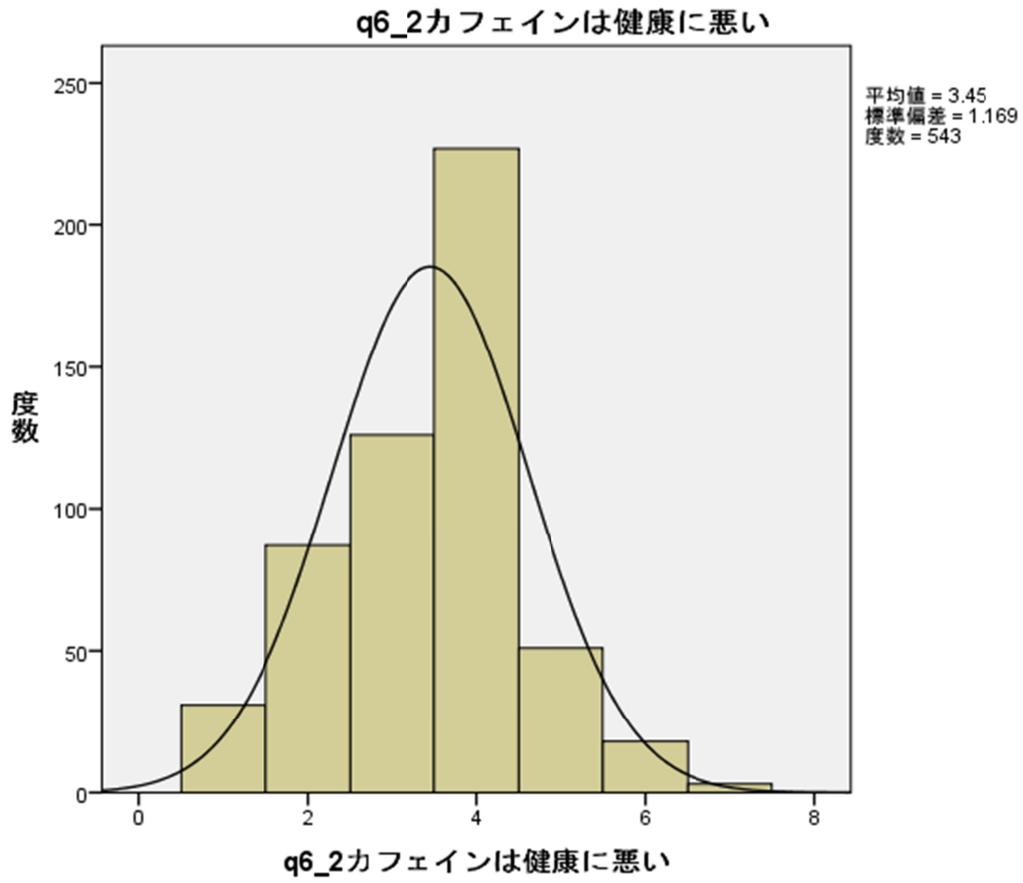


図 7 リスク認知の回答分布 (カフェイン)

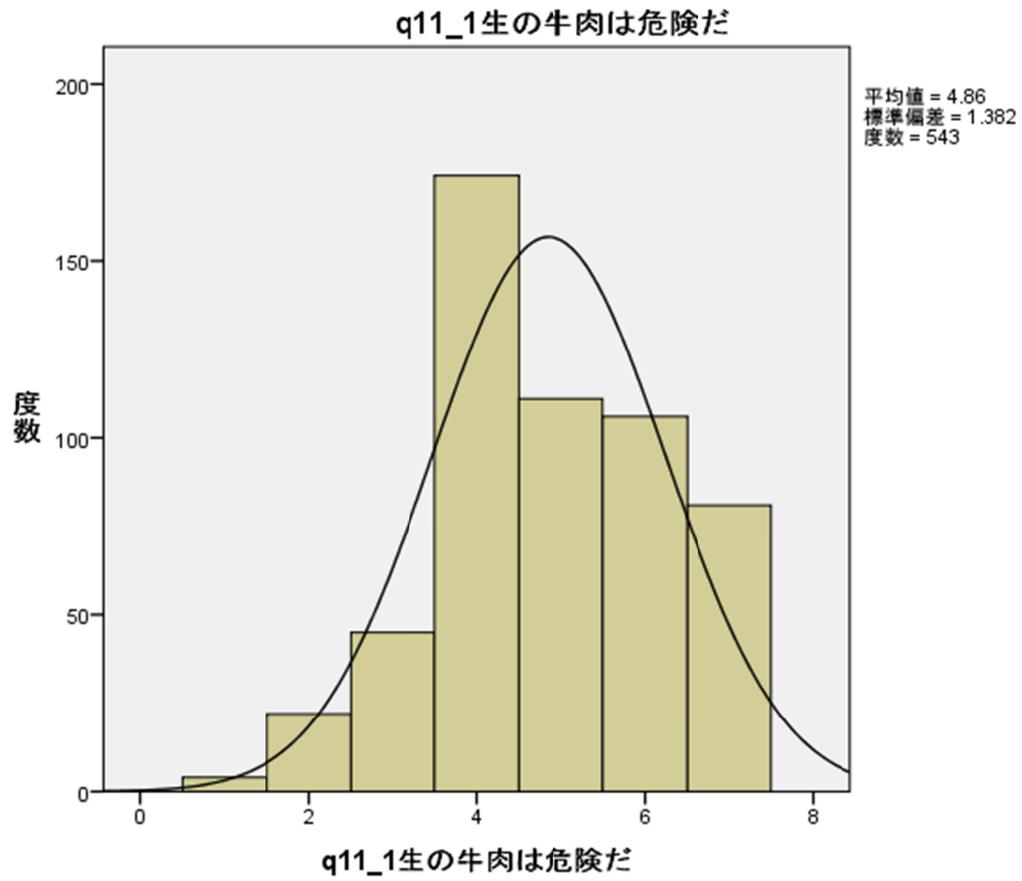


図 8 リスク認知の回答分布 (牛の生食)

表 1 リスク認知と各食品リスクの知識量のクロス集計表

食品添加物

		リスク認知		合計
		低	高	
知識量	知識少	160	131	291
	知識多	94	158	252
合計		254	289	543

カフェイン

		リスク認知		合計
		低	高	
知識量	知識少	96	178	274
	知識多	148	121	269
合計		244	299	543

牛の生食

		リスク認知		合計
		低	高	
知識量	知識少	153	111	264
	知識多	92	187	279
合計		245	298	543

表 2 リスク認知と各食品リスクの知識量のクロス集計表（リスク認知の高低の基準を修正後）

食品添加物

		リスク認知		合計
		低	高	
知識量	知識少	15	131	146
	知識多	21	158	179
合計		36	289	325

カフェイン

		リスク認知		合計
		低	高	
知識量	知識少	96	36	132
	知識多	148	36	184
合計		244	72	316

牛の生食

		リスク認知		合計
		低	高	
知識量	知識少	31	111	142
	知識多	40	187	227
合計		71	298	369

添付資料 1 3

表 3 知識量及びリスク認知による平均値比較（食品添加物）

	リスク認知	知識量多		知識量少		交互作用	知識量主効果	リスク認知主効果
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
q2_2添加物の安全性はきちんと審査されている	低	4.28	1.15	4.28	0.69			
	高	3.88	1.31	4.15	1.22			
q2_3添加物は豊かな食生活に欠かせない	低	4.38	1.08	4.12	0.73			
	高	3.97	1.29	4.04	1.13			
q2_4添加物を避けている	低	3.84	1.091	3.77	.818			
	高	4.88	1.248	4.44	1.110			
q3惣菜購入頻度	低	2.46	1.215	2.36	1.205			
	高	2.27	1.104	2.18	1.193			
q4ファーストフード利用頻度	低	1.64	.716	1.79	.879			
	高	1.64	.808	1.71	.789			

添付資料 1 4

表 4 知識量及びリスク認知による平均値比較（カフェイン）

	リスク認知	知識量多		知識量少		交互作用	知識量主効果	リスク認知主効果
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
q6_1コーヒーは健康に悪い	低	2.38	.884	2.35	.962			.000
	高	3.80	1.062	3.94	.922			
q6_3カフェインの安全性はきちんと審査されている	低	4.57	1.150	4.51	.973			.019
	高	4.44	.912	4.24	.812			
q6_4コーヒーは豊かな食生活に欠かせない	低	5.51	1.232	5.29	1.514	0.030	0.000	0.000
	高	5.09	1.169	4.39	1.175			
q6_5カフェインを避けている	低	2.33	1.157	2.21	1.104			0.000
	高	3.57	1.334	3.68	1.091			
q7コーヒー飲用頻度	低	4.64	.897	4.45	1.221		0.088	0.000
	高	4.10	1.440	3.89	1.573			
q8スタバ利用頻度	低	1.30	.600	1.29	.541	.064	.053	.002
	高	1.64	1.110	1.38	.816			
q9タリーズ利用頻度	低	1.25	.616	1.15	.383		.031	.027
	高	1.40	.852	1.25	.696			

添付資料 1 5

表 5 知識量及びリスク認知による平均値比較（牛の生食）

	リスク認知	知識量多		知識量少		交互作用	知識量主効果	リスク認知主効果
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
q11_2生の牛肉の安全性はきちんと審査されている	低	4.23	1.159	4.05	.817			
	高	3.96	1.408	4.10	1.362			
q11_3生の牛肉は豊かな食生活に欠かせない	低	4.10	1.351	3.90	.998			0
	高	3.19	1.674	2.98	1.595			
q11_4生の牛肉を避けている	低	4.14	1.323	4.16	1.109			0
	高	5.76	1.258	5.65	1.241			
q12生の牛肉食用頻度	低	1.62	.837	1.61	.897			0.043
	高	1.44	.824	1.48	.913			
q13焼き肉店利用頻度	低	1.46	.636	1.25	.507		0.008	0.05
	高	1.29	.551	1.23	.466			

添付資料 1 6

表 6 クラスタごとのパーソナリティの比較

	リスク認知	食品添加物				カフェイン				生の牛肉			
		知識量多		知識量少		知識量多		知識量少		知識量多		知識量少	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
q14_1周囲の人に比べ健康管理に気を使っている	低	4.26	1.235	3.99	1.037	4.52	1.327	4.41	1.319	4.26	1.078	4.24	1.005
	高	4.83	1.152	4.50	1.332	4.62	1.142	4.16	1.095	4.57	1.372	4.49	1.313
q14_3何事も慎重に判断する方だ	低	4.48	1.114	4.22	.976	4.70	1.227	4.57	1.093	4.51	1.053	4.36	.943
	高	4.97	1.079	4.83	1.046	4.81	1.067	4.48	.964	4.89	1.222	4.66	.977
q14_4人と比べて楽天的な性格だ	低	4.28	1.290	4.15	.992	4.31	1.456	4.26	1.250	4.40	1.301	4.16	1.048
	高	4.19	1.397	4.44	1.272	4.32	1.246	4.16	1.024	4.12	1.399	4.48	1.119
q14_5他人を信頼しない方だ	低	4.24	1.152	4.08	.984	4.28	1.277	4.22	1.163	4.11	1.253	4.09	.899
	高	4.39	1.286	4.37	1.118	4.42	1.174	4.19	.983	4.44	1.270	4.35	1.084
q14_6食べるのが好きである	低	5.29	1.012	4.81	1.261	5.54	1.121	5.33	1.327	5.35	1.063	4.75	1.154
	高	5.54	1.165	5.39	1.200	5.40	1.165	4.85	1.157	5.61	1.183	5.23	1.234
q14_7インターネット上のクチコミは信用しない	低	4.35	1.114	4.03	1.006	4.12	1.314	4.27	1.294	4.32	1.176	4.05	.923
	高	4.46	1.319	4.11	1.185	4.56	1.147	4.07	.951	4.41	1.293	4.11	1.246
N	低	94		160		148		96		92		153	
	高	158		131		121		178		187		111	

添付資料 1 7

表 7 クラスタごとのメディア行動の比較

	リスク認知	食品添加物				カフェイン				生の牛肉			
		知識量多		知識量少		知識量多		知識量少		知識量多		知識量少	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
ネットニュースを毎日見る	低	75	19	107	53	131	17	66	30	78	14	104	49
	高	140	18	100	31	98	23	127	51	154	33	86	25
Facebookを利用している	低	27	67	47	113	47	101	24	72	30	62	43	110
	高	56	102	34	97	34	87	59	119	58	129	33	78
Twitterを利用している	低	21	73	33	127	32	116	20	76	19	73	29	124
	高	40	118	29	102	29	92	42	136	47	140	28	83

数値は回答人数を示す

添付資料 1 8

表 8 「ネットニュースを毎日見ている」に対する重回帰

	食品添加物			カフェイン			生の牛肉		
	Wald	Exp(B)		Wald	Exp(B)		Wald	Exp(B)	
性別	-.41	3.63 †	.66	-.26	1.56	.77	-.30	1.95	.74
年齢	-.02	2.85 †	.98	-.01	1.53	.99	-.01	.72	.99
テスト正解数(知識量)	.18	21.87 **	1.20	.15	12.30 **	1.16	.14	8.50 **	1.15
危険性の認知	.18	2.74	1.19	-.06	.46	.94	.06	.63	1.07
定数	1.22	2.67	3.40	1.97	7.06 **	7.15	1.44	4.54 *	4.23

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

添付資料 1 9

表 9 「Facebook を利用している」に対する重回帰

	食品添加物			カフェイン			生の牛肉		
	Wald	Exp(B)		Wald	Exp(B)		Wald	Exp(B)	
性別	-.55	7.96 **	.58	-.49	6.50 *	.61	-.50	6.66 *	.61
年齢	-.04	17.61 **	.96	-.04	17.05 **	.96	-.04	16.74 **	.96
テスト正解数(知識量)	.04	1.27	1.04	.03	.52	1.03	.01	.06	1.01
危険性の認知	.12	1.95	1.13	-.02	.04	.98	.01	.03	1.01
定数	1.14	2.95 †	3.13	1.72	6.70 *	5.57	1.63	6.86 *	5.11

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

添付資料 2 0

表 1 0 「Twitter を利用している」に対する重回帰

	食品添加物			カフェイン			生の牛肉		
	Wald	Exp(B)		Wald	Exp(B)		Wald	Exp(B)	
性別	-.54	6.40 *	.58	-.47	4.96 *	.63	-.53	6.09 *	.59
年齢	-.04	15.69 **	.96	-.04	14.66 **	.96	-.04	14.83 **	.96
テスト正解数(知識量)	.04	1.14	1.04	.02	.36	1.02	-.01	.08	.99
危険性の認知	.17	3.18 †	1.19	.03	.11	1.03	.14	2.74 †	1.15
定数	.54	.55	1.71	1.16	2.58	3.18	.79	1.35	2.20

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

添付資料 2 1

表 1 1 因子分析の結果

	提示前(Time1)			提示後(Time2)		
	第1因子 リスク回避 行動	第2因子 リスク認知	第3因子 リスク容認 態度	第1因子 リスク回避 行動	第2因子 リスク認知	第3因子 リスク容認 態度
食品添加物が気になるので、コンビニでサンドイッチを買うことは避けている。	1.00			.99		
食品添加物が気になるので、コンビニで菓子パンを買うことは避けている。	.96			.95		
食品添加物が気になるので、コンビニで弁当を買うことは避けている。	.88			.91		
食品添加物がたくさん使われている食品は、危険であると思う。		1.01			.98	
食品添加物を摂取することは、種類に関わらず、危険であると思う。		.82			.89	
食品添加物の摂取を出来るだけ避けたいと思う。		.74			.60	
食品添加物は、豊かな食生活には欠かせないと思う。			.79			.82
少量であれば、食品添加物を摂取することは問題ないと思う。			.78			.77
食品添加物の安全性は、きちんと審査されていると思う。			.63			.69

因子負荷量 .35以下は省略した

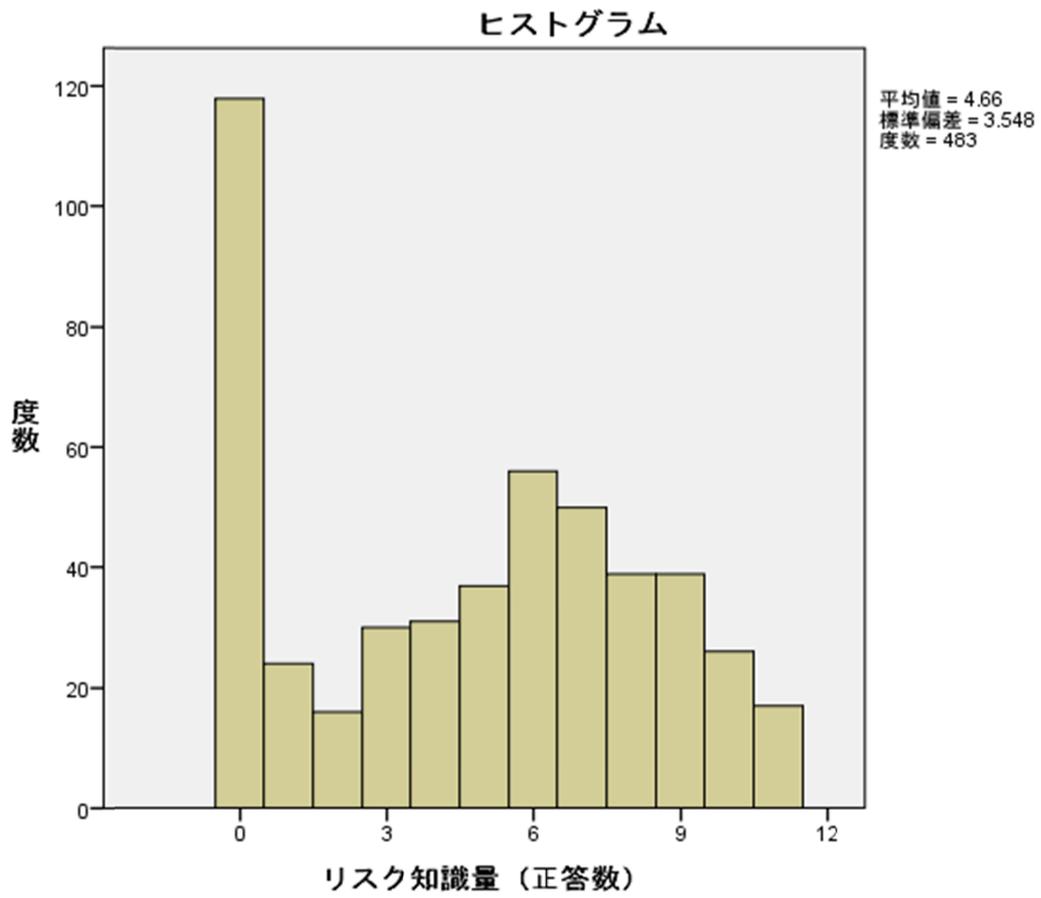


図 9 食品リスクに関する知識量を問う設問 (13 問) の正答数

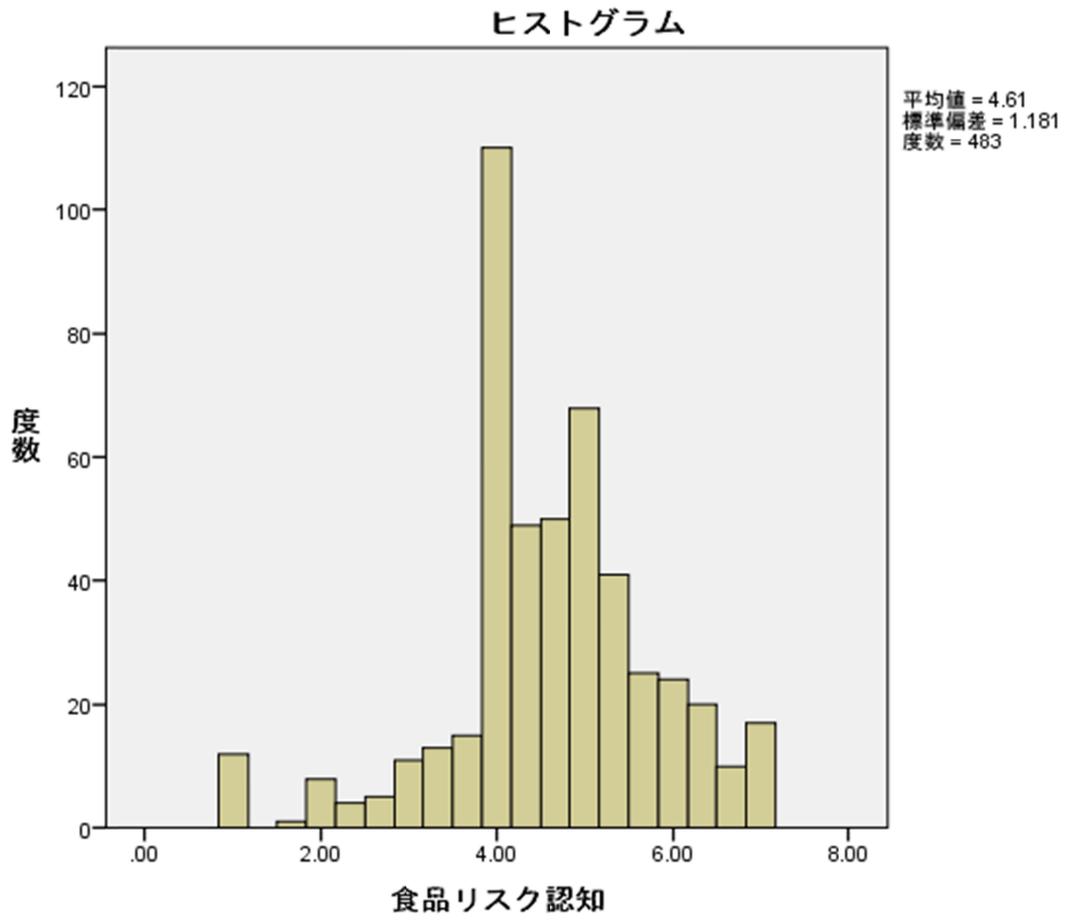


図 1 0 食品リスク認知レベルの分布

添付資料 2 4

表 1 2 各クラスタの人数と平均年齢

	A クラスタ	B クラスタ	C クラスタ	D クラスタ
	知識少・リ スク認知低	知識少・リ スク認知高	知識多・リ スク認知低	知識多・リ スク認知高
女性	58 名	68 名	30 名	88 名
男性	87 名	43 名	53 名	56 名
	145 名	111 名	83 名	144 名
平均年齢	42.79 歳	45.37 歳	45.81 歳	45.81 歳

表 1 3 クラスごとのパーソナリティとSNS利用

		Aクラス 知識少・リ スク認知低	Bクラス 知識少・リ スク認知高	Cクラス 知識多・リ スク認知低	Dクラス 知識多・リ スク認知高
周囲の人と比較して、健康管理には気を使っている方である。	<i>Mean</i>	3.87a	4.33b	3.96a	4.44b
	<i>SD</i>	1.19	1.43	1.20	1.15
何事も慎重に判断するようにしている。	<i>Mean</i>	4.11a	4.56b	4.39a	4.79b
	<i>SD</i>	1.13	1.18	.96	1.06
学生の頃、数学は得意な方であった。	<i>Mean</i>	3.74a	3.5a	4.07b	4.04b
	<i>SD</i>	1.47	1.68	1.75	1.71
人と比較して、楽天的な性格である。	<i>Mean</i>	3.83a	4.00b	4.11b	4.26b
	<i>SD</i>	1.22	1.46	1.29	1.35
他人をあまり信頼しない方である。	<i>Mean</i>	4.10	4.35	4.10	4.33
	<i>SD</i>	1.13	1.17	1.19	1.17
地図を見ながら、初めて行く場所にたどり着くことは苦手である。	<i>Mean</i>	3.75	3.43	3.34	3.77
	<i>SD</i>	1.46	1.68	1.52	1.75
インターネット上の情報はあまり信用していない。	<i>Mean</i>	3.9a	4.10b	3.9a	4.19b
	<i>SD</i>	1.05	1.00	1.02	1.07
マスメディアの情報はあまり信用していない。	<i>Mean</i>	3.94a	4.19a	4.24b	4.51b
	<i>SD</i>	1.08	1.11	1.11	1.17
スマートフォンを使用している。	<i>Mean</i>	4.29	4.52	3.93	4.25
	<i>SD</i>	1.99	1.94	2.01	1.99
自分のブログを書いている。	<i>Mean</i>	2.52	2.40	2.43	2.44
	<i>SD</i>	1.35	1.20	1.25	1.26
Facebookの利用頻度	<i>Mean</i>	1.92	1.86	2.00	1.97
	<i>SD</i>	1.48	1.44	1.47	1.47
Twitterの利用頻度	<i>Mean</i>	1.81	1.64	1.93	1.87
	<i>SD</i>	1.46	1.31	1.54	1.42
Instagramの利用頻度	<i>Mean</i>	1.28	1.37	1.11	1.30
	<i>SD</i>	.86	1.07	.49	.79
GREEの利用頻度	<i>Mean</i>	1.23	1.21	1.02	1.19
	<i>SD</i>	.78	.84	.15	.66
Yahoo!ニュースの利用頻度	<i>Mean</i>	2.83a	3.34b	2.96a	3.45b
	<i>SD</i>	1.74	1.67	1.55	1.58
Yahoo!知恵袋の利用頻度	<i>Mean</i>	1.74a	1.94b	1.94b	2.08b
	<i>SD</i>	.98	1.00	.94	1.01

太字は、有意差が見られた項目を示す。

添付資料 2 6

表 1 4 リスク回避記事提示前後のリスク認知・リスク容認態度・リスク回避行動の平均値

			Time1	Time2	情報提示 の主効果	メディアの 主効果	交互作用
Aクラスタ (知識少・リ スク認知 低)	リスク認知	ニュースサイト	3.74	3.88	†		
		Facebook	3.60	3.97			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.21	4.30	*		
		Facebook	3.85	4.04			
	リスク回避行動	ニュースサイト	3.12	3.51			
		Facebook	3.22	3.68			
Bクラスタ (知識少・リ スク認知 高)	リスク認知	ニュースサイト	5.38	5.28			
		Facebook	5.27	5.23			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.10	3.80	†		
		Facebook	4.19	4.07			
	リスク回避行動	ニュースサイト	4.26	4.72			
		Facebook	3.96	4.43			
Cクラスタ (知識多・リ スク認知 低)	リスク認知	ニュースサイト	3.68	4.32			**
		Facebook	3.85	4.74			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.23	4.18			
		Facebook	4.55	4.21			
	リスク回避行動	ニュースサイト	3.25	3.50			
		Facebook	3.12	3.52			
Dクラスタ (知識多・リ スク認知 高)	リスク認知	ニュースサイト	5.35	5.54			
		Facebook	5.44	5.47			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.11	4.13			
		Facebook	4.32	4.10			
	リスク回避行動	ニュースサイト	3.84	4.63			
		Facebook	4.25	4.91			

添付資料 2 7

表 1 5 リスク容認記事提示前後のリスク認知・リスク容認態度・リスク回避行動の平均値

			Time1	Time2	情報提示 の主効果	メディアの 主効果	交互作用
Aクラスタ (知識少・ リスク認知 低)	リスク認知	ニュースサイト	3.86	4.36	**	*	
		Facebook	3.54	3.96			
	リスク容認態度	ニュースサイト	3.92	4.30	**		
		Facebook	3.89	4.12			
	リスク回避行動	ニュースサイト	3.41	3.73	**		
		Facebook	3.18	3.59			
Bクラスタ (知識少・ リスク認知 高)	リスク認知	ニュースサイト	5.65	5.06	**		
		Facebook	5.36	4.94			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.22	4.35	†		
		Facebook	3.89	4.33			
	リスク回避行動	ニュースサイト	4.19	4.29			†
		Facebook	3.61	3.65			
Cクラスタ (知識多・ リスク認知 低)	リスク認知	ニュースサイト	3.67	3.88			
		Facebook	3.40	3.65			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.00	4.29	*	*	
		Facebook	4.40	5.01			
	リスク回避行動	ニュースサイト	3.23	3.35			
		Facebook	2.63	3.21			
Dクラスタ (知識多・ リスク認知 高)	リスク認知	ニュースサイト	5.41	4.91	**		†
		Facebook	5.75	5.24			
	リスク容認態度	ニュースサイト	4.11	4.37	*		
		Facebook	3.89	4.35			
	リスク回避行動	ニュースサイト	3.86	3.87			†
		Facebook	4.59	4.48			

添付資料 2 8

表 1 6 SNS の利用とリスク認知・知識量の相関関係

	リスク 知識量	リスク 認知	添加物 許容態度	添加物 回避行動
スマートフォンを使用している			.103*	
自分のブログを書いている				
Facebook利用頻度			.099*	
Twitter利用頻度			.158**	
Instagram利用頻度		.104*	.094*	.141**
GREE利用頻度			.105*	
Yahoo!ニュース利用頻度		.141**		
Yahoo!知恵袋利用頻度	.122**	.142**	.145**	
<i>N</i>	483	483	483	483

** = $p < .01$ * = $p < .05$

表には、有意であった相関係数だけを掲載している。

添付資料 2 9

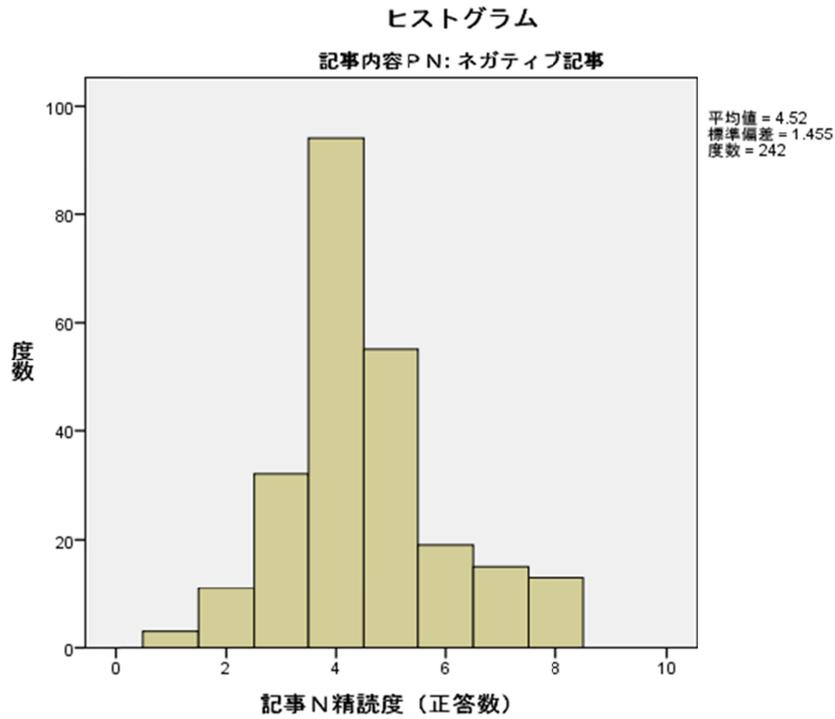


図 1 1 記事を読んだかどうかをチェックする問題の正答数

添付資料 3 0

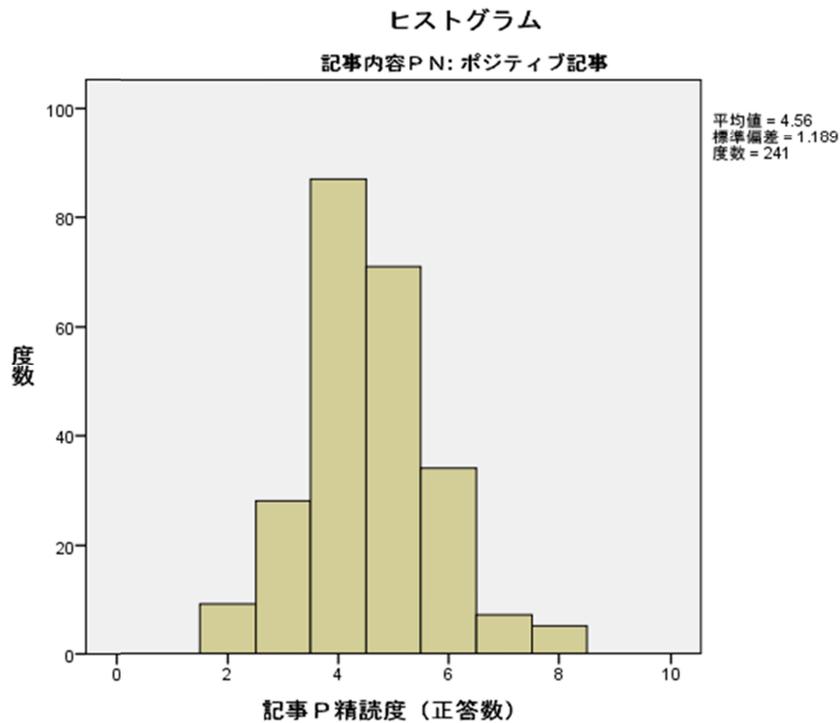


図 1 2 記事を読んだかどうかをチェックする問題の正答数